

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第142集

ふじ やま
藤山第1遺跡

Fujiyama 1 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 39

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第142集

ふじ やま
藤山第1遺跡

Fujiyama 1 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 39

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した藤山第1遺跡は、平成14年度に第一次調査、平成15年度に第二次調査を行い、縄文時代早期における集石遺構42基とともに縄文時代後期の土器を確認することができました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年1月

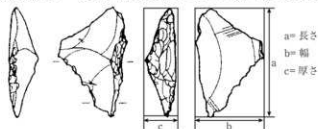
宮崎県埋蔵文化財センター
所長 清野 勉

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した藤山第1遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、小山博、渡辺美幸が行い、一部について発掘作業員の協力を得た。集石遺構の実測では、多くの職員・調査員の協力を得た。また、本書で使用した遺物写真は、今塩屋毅行が撮影した。
- 4 調査区の座標設置及びグリッドの設定は、有限会社私服部測量設計に委託した。なお、国土座標は旧国土座標第Ⅱ系に拠る。
- 5 地形測量実測は、有限会社三和コンサルタントに委託した。
- 6 空中写真撮影は、有限会社ふじたに委託した。
- 7 石器実測委託は、大成エンジニアリング株式会社に委託した。
- 8 整理作業は、遺物については埋蔵文化財センターで行い、鏝の整理については東睦原整理作業事務所において行った。
- 9 本書で使用した位置図は国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに作成し、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供された1000分の1図をもとに作成した。
- 10 本書で使用した方位は主に磁北（M.N.）であり、位置図等の一部は座標北（G.N.）である。また、標高は海拔絶対高である。
- 11 土層断面・石材の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
- 12 本書の執筆と編集は、小山が担当した。
- 13 石器の実測や図面の作成、本書の執筆にあたって、小山幸子（元宮崎市教育委員会）の協力を得た。
- 14 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 遺構の略号は次のとおりとする。
SI 集石遺構 SC 土坑
- 2 挿図の縮尺は次のとおりとする。
遺物実測図…2/3 1/2 2/5 1/4
遺構実測図…1/20 1/30
土層断面図…1/50 ※以上を基本とするが、これ以外のものもある。
- 3 石器計測表の計測値は、下記の計測方法に拠った。単位は、cm、gである。
- 4 石器の節理面は一点鎖線で表示した。微細剥離のみられる部分は↔でその範囲を示した。「折れ」の部分は、欠損部分に∧の記号を記した。ガジリは白抜きで表現している。



【石器の分類について】

本文中に掲載されている石器は、すべて下記に基づいて分類されている。

ナイフ形石器

I類：一側縁加工のもの

- a：縦長剥片を素材として使用するもの
- b：横長剥片を素材として使用するもの
- c：不定形剥片を素材として使用するもの（例、幅広い剥片）

II類：二側縁加工のもの

- a：縦長剥片を素材として使用するもの
- b：横長剥片を素材として使用するもの
- c：不定形剥片を素材として使用するもの（例、幅広い剥片）
- d：横剥ぎ（瀬戸内系の可能性のあるもの）
- e：切り出し型

エンド・スクレイパー

I類：素材の下縁のみに刃部を形成するもの

II類：素材の全周に対して1/2の縁辺に刃部加工を施すもの

III類：素材の全周もしくは3/4周程度に刃部を形成するもの

IV類：いわゆる「ラウンド・スクレイパー」と称されるもので、円形を呈するもの

サイド・スクレイパー

I類：素材の片側の縁辺に刃部加工を施すもの

II類：素材の両側の縁辺に刃部加工を施すもの

二次加工剥片

I類：縦長剥片を素材として使用するもの

II類：横長剥片を素材として使用するもの

III類：幅広い剥片を素材として使用するもの

使用痕剥片

I類：縦長剥片を素材として使用するもの

II類：横長剥片を素材として使用するもの

III類：幅広い剥片を使用するもの

石核

I類：単設打面を中心に剥片剥離作業が行われるもの

II類：打面転移を繰り返しながら剥片剥離作業が行われるもの

III類：石核縁辺を打面として剥片剥離作業を行うもの

磨石・敲石・磨石兼敲石

I類：素材の形状が扁平な円形もしくは楕円形をなすもの

II類：素材の形状が棒状をなすもの

石鏃

I類：正面観が正三角形を呈するもの

- a：脚部が平基のもの
- b：脚部が凹基のもの

II類：正面観が二等辺三角形を呈するもの

- a：脚部が平基のもの
- b：脚部が凹基のもの

III類：未製品

石斧

I類：打製

II類：磨製

本文目次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第II章	遺跡の環境	
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第III章	調査の経過と方針	
第1節	確認調査の概要	5
第2節	発掘調査の方法	5
第3節	整理作業及び報告書作成	7
第IV章	調査の概要	
第1節	調査の概要	9
第2節	基本層序	9
第3節	後期旧石器時代の遺物	
(1)	遺物	10
第4節	縄文時代早期の遺構と遺物	
(1)	遺構	22
(2)	遺物	45
第5節	縄文時代後期・晩期の遺物	
(1)	遺物	55
第6節	その他の遺構・遺物	
(1)	遺構	61
(2)	遺物	61
第V章	まとめ	
	集石遺構	
(1)	形態分類について	64
(2)	使用された礫について	64
	遺物	66
	まとめ	66

挿図目次

第1図	遺跡分布図	3	第21図	A区集石遺構実測図(2)	29
第2図	遺跡周辺地形図	4	第22図	A区集石遺構実測図(3)	30
第3図	確認調査トレンチ配置図	6	第23図	A区集石遺構実測図(4)	31
第4図	グリッド配置図	8	第24図	A区集石遺構実測図(5)	32
第5図	接合資料分布図(B区)	10	第25図	A区集石遺構実測図(6)	33
第6図	旧石器時代の遺物実測図(1)	12	第26図	A区集石遺構実測図(7)	34
第7図	旧石器時代の遺物実測図(2)	13	第27図	A区集石遺構実測図(8)	35
第8図	旧石器時代の遺物分布図(1)	14	第28図	A区集石遺構実測図(9)	36
第9図	旧石器時代の遺物分布図(2)	15	第29図	A区集石遺構実測図(10)	37
第10図	旧石器時代の遺物実測図(3)	16	第30図	A区集石遺構実測図(11)	38
第11図	旧石器時代の遺物実測図(4)	17	第31図	A区集石遺構実測図(12)	39
第12図	旧石器時代の遺物実測図(5)	18	第32図	B-1区集石遺構実測図(1)	40
第13図	埴層出土遺物分布図(1)	19	第33図	B-1区集石遺構実測図(2)	41
第14図	埴層出土遺物分布図(2)	20	第34図	B-1区集石遺構実測図(3)	42
第15図	埴層出土遺物分布図	21	第35図	B-2区集石遺構実測図(1)	43
第16図	A区地形図・遺構分布図 及び土層断面	24	第36図	B-2区集石遺構実測図(2)	44
第17図	集石遺構分布図(1)	25	第37図	B-2区集石遺構実測図(3)	45
第18図	集石遺構分布図(2)	26	第38図	縄文時代早期遺物分布図(1)	46
第19図	集石遺構分類グラフ	27	第39図	縄文時代早期遺物分布図(2)	47
第20図	A区集石遺構実測図(1)	28	第40図	縄文時代早期の遺物実測図(1)	48
			第41図	縄文時代早期の遺物実測図(2)	49

第42図	縄文時代早期の遺物実測図(3)	50	図版9		83
第43図	縄文時代早期の遺物実測図(4)	51	出土遺物(3)	：遺物No40、48、51、52、54-69	
第44図	縄文時代早期の遺物実測図(5)	52	図版10		84
第45図	縄文時代早期の遺物実測図(6)	53	出土遺物(4)	：遺物No70-87	
第46図	縄文時代早期の遺物実測図(7)	54	図版11		85
第47図	縄文時代後・晩期遺物分布図	55	出土遺物(5)	：遺物No88-101	
第48図	縄文時代後・晩期の遺物実測図(1)	56	図版12		86
第49図	縄文時代後・晩期の遺物実測図(2)	57	出土遺物(6)	：遺物No102-119	
第50図	縄文時代後・晩期の遺物実測図(3)	58	図版13		87
第51図	その他の時代の遺物分布図	61	出土遺物(7)	：遺物No121-128、130-133 爆弾の尾翼部分	
第52図	土坑実測図	62			
第53図	その他の時代の遺物実測図	63			
第54図	集石遺構確重量分布図	67			
第55図	集石遺構確分析図(1)	68			
第56図	集石遺構確分析図(2)	69			

表目次

第1表	接合資料計測表	11
第2表	石器計測表(旧石器)	19
第3表	集石遺構一覧表	23
第4表	集石遺構分類表	42
第5表	土器観察表	49
第6表	石器計測表(縄文時代)	54
第7表	土器観察表	59
第8表	土器観察表	63
第9表	石器計測表①	70
第10表	石器計測表②	71

図版目次

図版1		75
遺跡遠景(北から)		
調査区全景(南から)		
図版2		76
A区散礫検出状況		
B-1区散礫検出状況		
図版3		77
A区散礫検出状況(北から)		
B-2区散礫検出状況(南から)		
S11散礫検出状況(南から)		
B-1区集石遺構検出状況(北から)		
図版4		78
S13検出状況・完掘状況、S14検出状況・完掘状況		
S140検出状況・完掘状況、S11検出状況・完掘状況		
図版5		79
S115検出状況・S12検出状況・配石検出状況・完掘状況、S19検出状況・配石検出状況、SC3完掘状況		
図版6		80
SC6平載状況、A区遺物出土状況		
B-1区X1層状況、作業風景1・2		
図版7		81
出土遺物(1)：接合資料1-4、遺物No15-24		
図版8		82
出土遺物(2)：遺物No25-39、41-47、49、50		

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道(都農～西都間)は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに、平成9年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成11年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

藤山第1遺跡は児湯郡新富町大字新田字綿内の工事区内にある。平成13年11月1日～11月20日に確認調査を実施した。調査対象地のうち、国の所有地を平成14年6月3日～7月15日に一次調査として調査した。残りの調査対象地は、平成16年6月7日～6月29日に確認調査を実施した。確認調査の結果、調査対象地を広げて平成16年7月13日～9月24日まで第二次調査を実施することになった。

第2節 調査の組織

藤山第1遺跡の調査組織を次に示す。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

矢野 剛 (平成13年度)

米良 弘康 (平成14・15年度)

宮園 淳一 (平成16・17年度)

清野 勉 (平成18年度)

副所長兼総務課長

菊池 茂仁 (平成13年度)

大園 和博 (平成14～16年度)

副所長

加藤 悟郎 (平成18年度)

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫 (平成13～18年度)

総務課長

宮越 尊 (平成17・18年度)

総務係長

亀井 維子 (平成13年度)

野邊 文博 (平成14年度)

主幹兼総務係長

石川 恵史 (平成15～17年度)

主幹兼総務担当リーダー

高山 正信 (平成18年度)

調査第一課長

面高 哲郎 (平成13年度)

児玉 章則 (平成14・15年度)

高山 富雄 (平成16～18年度)

調査第一係長

谷口 武範 (平成13～16年度)

主幹兼調査第一係長

長津 宗重 (平成17年度)

主幹兼調査第一担当リーダー

長津 宗重 (平成18年度)

調査第二係長

長津 宗重 (平成13～15年度)

主幹兼調査第二係長

長津 宗重 (平成16年度)

主幹兼調査第二係長

菅付 和樹 (平成17年度)

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹 (平成18年度)

一次確認調査担当 (平成13年度)

主査 戌亥 浩志

一次調査担当 (平成14年度)

主任主事 小山 博

調査員 小字都 あずさ

二次確認・調査担当 (平成16年度)

主査 小山 博

主事 渡辺 美幸

調査協力

一ツ瀬土地改良区

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

藤山第1遺跡は、新富町大字新田字綿内に所在する。新富町は、宮崎平野のやや中央寄りの沿岸部にあり、洪積台地が大部分を占める。北部には茶臼原台地、三財原台地、新田原台地と丘陵が広がり、南部には一ツ瀬川の低地が広がる。

本遺跡は、新田原台地の南西部の台地縁辺部に広がる丘陵と藤山川流域沿いの低位段丘面に位置する。本遺跡の周辺に広がる台地は小河川による浸食を受けており、開析谷が広がっているとみられるが、採石やため池の建設などによって、地形は改変されている。

第2節 歴史的環境

本遺跡では、旧石器時代の遺物が確認され、縄文時代早期の遺構・遺物が検出・確認された。また、弥生時代の遺物も確認された。そこで、遺跡周辺の同時期の遺跡について概観する。

1 旧石器時代

新富町内では、新田原台地の北西端に位置する畦原地区で大野寅夫氏が「畦原型細石核」を表採している。この細石核は南九州の一部に限定して分布するという、地域性のきわめて強いものである。

また、新田原台地上の溜水遺跡、銀代ヶ追遺跡などでは、ナイフ形石器や角錐状石器・細石刃・スクレイパー等が出土している。

東九州自動車道建設に伴う発掘調査でも、新富町内の遺跡では旧石器時代の遺構や遺物が確認されている。

2 縄文時代

新富町内におけるこの時期の代表的な遺跡は、新田原段丘面の西南端の春日地区に所在する瀬戸口遺跡である。標高約70mの台地縁辺部にあり、集石遺構23基を検出し、縄文時代草創期の隆起線土器、早期の押型文・貝殻条痕土器、石鏃・石斧・石錘・磨石等の石器などが出土している。

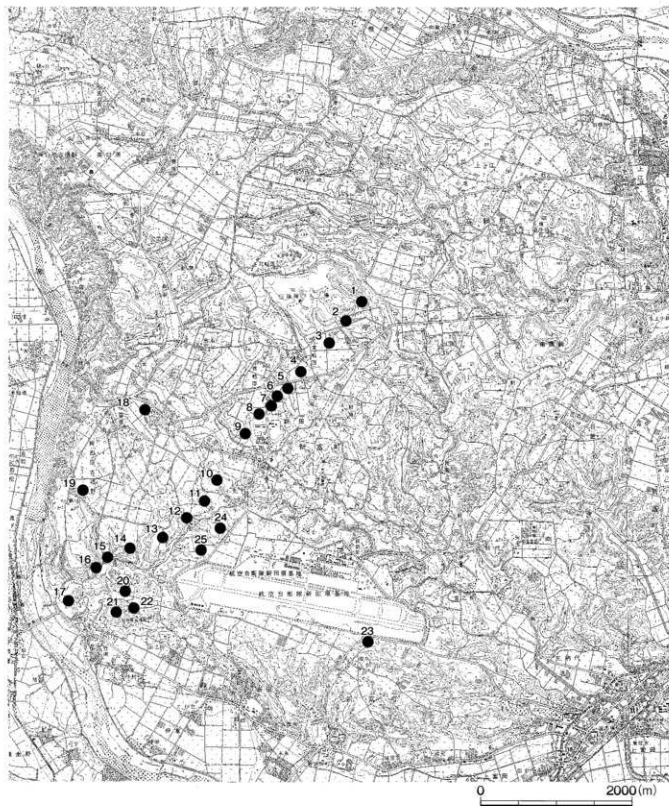
また、新田原段丘面最南端に位置する八幡上遺跡や七又木遺跡、銀代ヶ追遺跡でも縄文時代早期の集石遺構が検出され、同時期の遺物が出土している。

東九州自動車道関連の調査でも、同様の成果が確認されている。本遺跡に近い藤山第2遺跡と向原第1遺跡でも、集石遺構と同時期の遺物が出土している。本遺跡の北東に位置する尾小原遺跡(三次調査)では、尾根上に散磔が広がりその下から集石遺構を65基、炬穴を7基検出しており、押型土器や条痕土器などが出土している。その他に、勘大寺遺跡、上新開遺跡、西畦原第1遺跡(二・三次)、西畦原第2遺跡、東畦原第1遺跡(三・四次)、東畦原第3遺跡、音明寺第1遺跡でも集石遺構が検出されている。

3 弥生時代

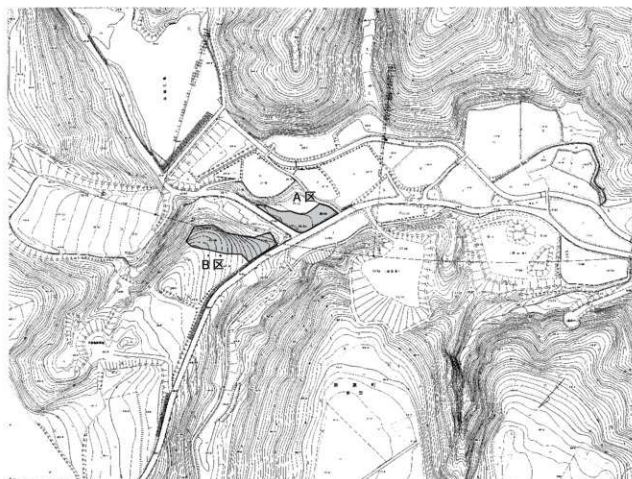
新富町内のこの時代の遺跡としては、鬼付女川と日置川の間を南東に延びる標高約60mの洪積台地南端に立地する鏡遺跡がある。調査の結果、弥生時代中期前半の堅穴住居跡2軒とV字溝が一条検出された。弥生時代後期の遺跡として、新田原台地を大きく刻んだ藤山川の上流の谷に位置する新田原遺跡がある。新田原遺跡では、花卉状住居跡を始めとする住居跡や弥生土器が出土している。また、鬼付女川の西側、鬼付女川のほとりにあたりわずかに高くなった砂丘状に位置する鬼付女西遺跡でも、後期の堅穴住居跡と周溝状遺構が検出され、同時代の遺物も出土している。鬼付女西遺跡の約20mの鬼付女川上流に園田遺跡が位置する。園田遺跡でも後期の堅穴住居跡が検出され、銀代ヶ追遺跡でも後期中葉の堅穴住居跡が検出され同時代の土器が出土している。

東九州自動車道関連の遺跡でも、同時代の遺構や遺物が確認されている。本遺跡で出土した突帯土器が出土している遺跡は、本遺跡の周辺に位置する向原第1遺跡、藤山第2遺跡で出土している。他に尾小原遺跡(二次)、永平田第1遺跡、西畦原第1遺跡、西畦原第2遺跡D区でも出土している。



- | | | | | |
|-------------|-----------------|-----------------|------------|------------|
| 1. 吉明寺第1遺跡 | 2. 吉明寺第2遺跡 | 3. 東畦原第1遺跡 | 4. 東畦原第2遺跡 | 5. 東畦原第3遺跡 |
| 6. 西畦原第1遺跡 | 7. 西畦原第2遺跡 (三次) | 8. 西畦原第2遺跡 (二次) | 9. 上新間遺跡 | 10. 助大寺遺跡 |
| 11. 水平田第1遺跡 | 12. 水平田第2遺跡 | 13. 尾小原遺跡 | 14. 向原第1遺跡 | 15. 藤山第1遺跡 |
| 16. 藤山第2遺跡 | 17. 宮ノ東遺跡 | 18. 川床遺跡 | 19. 瀬戸口遺跡 | 20. 八幡上遺跡 |
| 21. 銀代ノ迫遺跡 | 22. 七又木遺跡 | 23. 溜水遺跡 | 24. 新田原A遺跡 | 25. 新田原B遺跡 |

第1図 遺跡分布図 (1/50,000)



第2図 周辺地形図 (S=1/4,000)

0 200m

【参考文献】

- 『新富町史』 通史編、新富町、1992年
『新富町史』 資料編、新富町、1992年
『新富町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書』
新富町、1982年
『西畦原第1遺跡 西畦原第2遺跡D区』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第82集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2004年
『東畦原第3遺跡』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第87集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2004年
『藤山第2遺跡』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第95集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2004年
『西畦原第2遺跡 (第一次調査)』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第106集、宮崎県埋蔵文化財センター、2004年
『音明寺第1遺跡』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第102集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2004年
『永平田第1遺跡』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第114集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2005年
『向原第1遺跡』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第119集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2006年
『上新開遺跡』 (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第129集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2006年
『東九州自動車道 (都農～西部間)』 関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI (宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第131集) 宮崎県埋蔵文化財センター、2006年

第Ⅲ章 調査の経過と方針

第1節 確認調査の概要

調査対象地には、国の所有地と個人の所有する住宅地と畑があり、住宅地は移転が終了するのが平成16年度の予定であった。最初に国有地である畑で、平成13年11月1日～11月20日にかけて確認調査を実施した（一次確認調査）。3m×3mのトレンチを3本、3m×5mのトレンチを1本の合計4本のトレンチを入れたところ、集石遺構を1基と、古墳時代と縄文時代の遺物が確認された。この結果を受けて、翌平成14年度に国の所有地である畑を発掘調査することになった（一次発掘調査）。

平成16年度に住宅などの移転が終了したので、平成16年6月7日～6月29日の期間に、残りの対象地の確認調査を実施した（二次確認調査）。この確認調査では、一次確認調査で確認された土器は遺構内からの出土ではなく、北側の丘陵からの流れ込みの可能性が高かったので、牧場として利用されていた丘陵を加えて確認調査を実施した。それぞれにトレンチを設定し作業員による掘り下げを実施したところ、剥片などの遺物や集石遺構の一部と見られる焼けた礫などが確認された。この結果を受けて、翌月に発掘調査を実施することとなった（第二次発掘調査）。

1 一次確認調査の概要

国の所有地である土地は、牧草地として利用されていた。この土地に3m×3mのトレンチを3本と3m×5mのトレンチを1本、合計4本のトレンチを設定した。掘り下げを実施したところ、1箇所の特レンチより散礫を確認し、集石遺構を1基検出した。また、別のトレンチからは古墳時代と縄文時代の土器片などの遺物が出土した。3m×5mの特レンチの一部を深掘りし、基盤層である宮崎層群やその上部の堆積層である砂礫層を確認した。

調査結果から、調査区の北東側を発掘調査することになった。

2 二次確認調査の概要

住居などの移転が終了した平成16年度に、本調査に先立ち確認調査を実施した。一次調査で調査した畑の部分を除いた畑地に、丘陵を加えた箇所を確認調査した。一次調査では、縄文時代後期と古墳時代の土器が出土しており、出土状況から流れ込みと考えられたので、北側の丘陵も確認調査の対象地として範囲を広げた。一次調査で調査した部分を除く畑地に4本と道路をはさんだ畑地に3本、丘陵の頂上部に4本、緩やかに傾斜している尾根に4本の合計15本のトレンチをそれぞれ設定し、作業員の手掘りで掘り下げを行った。一次調査をした畑と道路をはさんだ畑地からは遺物などは確認されず、他のトレンチからは集石遺構の礫とみられる焼けた礫や石器の剥片などが確認された。

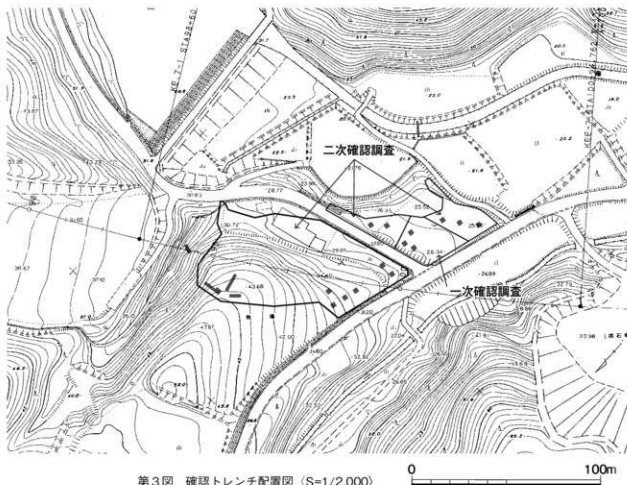
この結果、一次調査を実施した畑地と道路をはさんで位置する畑地は除外し、北側の丘陵を加えた範囲を本調査することになった。

第2節 発掘調査の方法

1 調査の方法と調査区の設定・調査の手順

平成14年度に国の所有地である畑を第一次発掘調査として調査した。第一次確認調査で確認されたアカホヤ火山灰層の残存する箇所を調査対象地とした。また、集石遺構を確認したトレンチを広げながら他に集石遺構がないか確認した。表土は重機で剥ぎ、後は作業員による掘り下げを行った。旧地権者の来訪があり、戦後一時期までは畑地はもともと住宅地として使用されていたことを聞いた。調査区からは宅地の礎石やサイロ跡とみられる円形のコンクリートの塊などが検出され、かつて住宅地であったことが確認された。

平成16年度には、残りの調査区と当初調査対象外であった丘陵を加えた箇所を二次調査として発掘調査した。重機による表土剥ぎを実施した後、作業員による掘り下げを順次実施した。平坦部の畑地にはアカホヤ火山灰層が残存していた。丘陵は小林軽石を伴う褐色ロームが残存していた。掘り下げを行っ



第3図 確認トレンチ配置図 (S=1/2,000)

たところ、散礫に伴う礫が検出され、散礫を取りはずした後、集石遺構を検出した。丘陵の緩やかに傾斜する尾根部は牧草を重機で剃いた時点で焼けた礫が検出された。

2 調査報告会

平成17年7月9日に、東九州自動車道(都農～西都間)関連の新富町内の遺跡と、新富町教育委員会が発掘調査中の百足塚古墳の合同報告会を新富町文化会館で実施した。106名の参加があった。

3 日誌抄

【第一次発掘調査】

○平成14年6月

3日にプレハブなどの搬入を行う。4日重機による表土剥ぎを実施する。5日より作業員によるジョレンかけを行い、遺構の検出作業を行う。調査区はもともと宅地として利用されていたことから、廃材

や家屋の基礎とみられるコンクリート片が確認される。そこで、一次確認調査でトレンチを入れていない箇所を中心にトレンチを数本入れて攪乱されていない箇所を絞り込み、掘り下げることとする。10日より調査区を絞り込み掘り下げを実施する。掘り下げとともに土器などの遺物が出土する。25日アカホヤ火山灰層の直上まで掘り下げ終了。26日からアカホヤ火山灰層の掘り下げを行う。

○平成14年7月

3日より確認調査で集石遺構を検出したトレンチを中心に周囲を掘り下げ、礫の広がりを確認する。8日より集石遺構の検出作業と同時にアカホヤ火山灰層下の層の掘り下げを行う。11日散礫の範囲を確定し、散礫の礫の取り外しを行う。12日より集石遺構の実測を行う。17日集石遺構の実測終了。18日埋め戻しを実施し、調査を終了する。

【第二次発掘調査】

○平成16年7月

12日重機業者と打ち合わせを行う。宅地跡を排土置き場にするために、13日より排土置き場の整備を行う。20日より重機による表土剥ぎを実施する。21日より重機による表土剥ぎを行いながら、作業員によるジョレンかけを行う。26日より畑部分と丘陵部分に分かれて作業を行う。丘陵部では焼けた礫を検出する。

○平成16年8月

2日より小林軽石を含む褐色土までの掘り下げを行う。9日畑部で集石遺構を検出する。12日丘陵の頂上部で散礫と思われる礫の検出作業を行う。

○平成16年9月

1日畑部でアカホヤ火山灰層の掘り下げ中に第二次世界大戦中の米軍の爆弾と思われる尾翼部分を発見。高鍋警察署、県警察署による爆弾の撤去を行う。爆弾は尾翼のみであり、弾頭は発見されなかった。新富町役場と対応を協議する。爆弾の尾翼を発見した箇所の掘り下げは、安全上問題があるので掘り下げず終了する。2日より集石遺構の実測を開始する。24日集石遺構の実測を終了する。現場事務所などの撤去を行う。

○平成16年10月

1日集石遺構の礫を東畦原整理作業事務所に搬出する。調査終了する。



爆弾撤去作業（高鍋警察署）

第3節 整理作業及び報告書作成

1 整理の方針・方法

本遺跡で発掘された資料の整理作業は、平成16年11月より、遺物等については本センターで整理作業を開始し、新富町大字新田字下迫口所在の東畦原整理作業事務所では集石遺構の礫の整理を実施した。

本センターでの整理作業は、平成16年11月から翌平成17年3月までに水洗、注記を行い、石器の計測、石材の分類を実施し、石器の接合作業を実施した後、土器の接合作業を実施した。

東畦原整理作業事務所では、二次調査で検出した集石遺構の礫の整理を実施した。平成16年11月から翌平成17年5月まで礫の洗浄、注記、計測を行った。計測は、礫の計測値と石材・赤化の有無などの記録をとった。

石器の接合作業終了後には、石器実測委託を平成17年10月に行った。

平成18年4月より、土器の実測と礫データの入力作業を実施する。

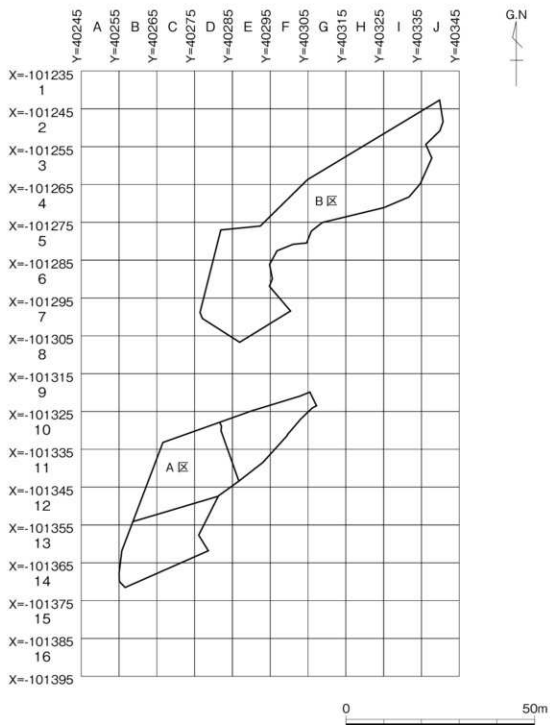
2 報告書作成の方針・方法

報告書作成について、遺物の整理作業の進捗に合わせて礫や遺物のデータの整理を順次行った。平成18年4月より遺構・遺物の実測図やトレース図等の作成と点検、報告書レイアウトと文章作成等を随時行った。

3 整理作業・報告書作成作業工程の実態

東畦原整理作業事務所平成16年11月1日より礫の整理を開始する。礫の水洗・注記・計測・データ入力の作業を実施する。平成17年5月に作業が終了する。

本館での作業は、平成16年11月から平成17年3月まで水洗・注記・接合・計測の作業を実施した。平成18年4月から土器の実測作業を開始し、平成18年8月に終了する。



第4図 グリッド配置図 (S=1/1,000)

平成17年10月11日から平成18年1月17日までに大成エンジニアリング株式会社に石器実測を委託する。

平成18年4月より報告書作成を開始する。

第IV章 調査の概要

第1節 調査の概要

本遺跡の調査では、後期旧石器時代の遺物と縄文時代早期の遺構と遺物、縄文時代後期と弥生時代、古墳時代の遺物が出土した。

後期旧石器時代の遺物は、小林軽石 (Kr-Kb) を含む褐色ローム層中から出土している。また、始良Tn火山灰 (AT) の降灰は、B2区の一部で確認できたが、他では確認されなかった。地形が丘陵であり、遺物が流れ込んだりしている可能性もあるので、層位的に時代を明確化するのは困難である。

縄文時代早期の遺構としては、集石遺構が42基検出された。いずれもアカホヤ火山灰層 (K-Ah) の下の小林軽石 (Kr-Kb) を含む褐色ローム層中から検出された。集石遺構は丘陵の頂上部 (B1区) で13基、丘陵の緩やかな尾根部 (B2区) で10基、平坦地の畑地 (A区) で19基検出された。丘陵の頂上部で検出された集石遺構には土器は出土しておらず上部の散礫中から貝殻条痕文土器が出土している。丘陵の尾根部と平坦部で検出された集石遺構からは、押型文土器が出土している。出土した土器が異なることより時期的な違いが窺える。

平坦部の畑地 (A区) の旧地形は、谷地形とみられ、その落ち込み部分と見られる箇所では縄文時代後期と弥生時代の遺物が出土している。また、I層の黒色土が一部残存しており、古墳時代の遺物が出土している。

二次調査では、A区の東側の調査区でアカホヤ火山灰層 (K-Ah) が残存していることが確認された。上層の掘り下げが終了し、アカホヤ火山灰層 (K-Ah) を作業員によって掘り下げたときには、第二次世界大戦中の米軍の爆弾と思われる尾翼を確認した。アカホヤ火山灰層に爆弾が突き刺さった状態であり爆発していなかった。高鍋警察署と新富町役場に連絡し、宮崎県警察本部と高鍋警察署の生活安全課の職員によって爆弾の撤去を行ったが、尾翼部分のみで爆弾の弾頭部分は確認されなかった。宮崎県警察本部の生活安全課の職員が金属探知器を使用して探查を行なったが発見されなかった。作業員の安全の

ため、この箇所でのアカホヤ火山灰層の掘り下げを中止することにした。

第2節 基本層序 (第16図)

本遺跡で確認された層序は、概ね下記の基本層序に集約される。畑地では一部I層の黒色土が残っており、IV層のK-Ahから残存していた。丘陵部は牧場として整地されたためにVIII層のKr-Kbを含む褐色ロームから残存していた。VIII層より下は、IX層のATが確認されたB2区を除いて、すべて礫層である。基本層序は以下に示すとおりである。

表 土

第I層：黒色土

第II層：明黄褐色ローム

第III層：暗褐色ローム

第IV層：アカホヤ火山灰層 (K-Ah)

第V層：黒褐色ローム (MB0)

第VI層：暗褐色ローム

第VII層：明褐色ローム (ML1)

第VIII層：小林軽石 (Kr-Kb) を含む褐色ローム

第IX層：始良Tn (AT)

第X層：明黄褐色ローム

第XI層：礫層

第3節 後期旧石器時代の遺物

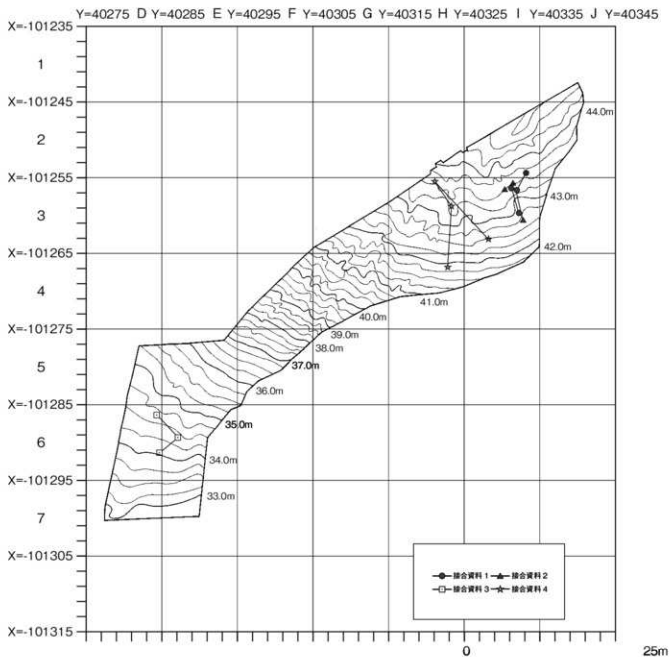
(1) 遺物

後期旧石器時代の遺物は主にⅧ層から出土している。丘陵部の一段低くなった緩やかな斜面であるB2区では、部分的にATを確認できたが、その他の箇所では確認できなかった。丘陵という地形であり流れ込みなどの可能性も高いので、層的には時代を明確化できない。遺物が出土したⅧ層の小林軽石を含む褐色ロームは、後期旧石器時代と縄文時代の包含層である。丘陵という傾斜地である地形的な状況もあり、接合資料を旧石器時代とするには不安がある。接合資料を観察すると、幅広く不定形な剥片

が剥離されていること、石核の形態的特徴が剥片剥離技術を考慮して、旧石器時代の特徴を反映していること、石材もホルンフェルス・砂岩・流紋岩などを中心に利用していることから、旧石器時代の遺物と判断している。また製品などの石器は、主に器種で旧石器時代と判断している。

【接合資料】

接合資料は丘陵の頂上部であるB1区と緩やかに傾斜している尾根部であるB2区のⅧ層から出土している（第5図）。



第5図 接合資料分布図 (B区) (S=1/500)

接合資料1 (第6図)

B1区のⅧ層出土の剥片4点が接合している。石材はホルンフェルスである。剥離順序は1→4→3→2で剥片剥離が行われている。

接合資料2 (第6図)

B1区のⅧ層出土の石核1点と剥片2点の合計3点が接合している。石材は流紋岩である。打面転移を繰り返し剥片剥離作業を行っている。剥離順序は7→6で、5は剥片剥離の行われた残核とみられる。

接合資料3 (第7図)

B2区のⅧ層出土の石核1点と剥片2点の合計3点が接合している。石材はホルンフェルスである。単設打面により剥片剥離作業を行っている。剥離順序は10→9で、8は剥片剥離の行われた残核とみられる。

接合資料4 (第7図)

B2区のⅧ層出土の剥片4点が接合している。石材はホルンフェルスである。剥離順序は14→13で、11は何らかのアクシデントにより割れたものとみられる。

第1表 接合資料計測表

接合資料1

レイアウトNo.	調査区	Gr.	層	取出しNo.	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
接合資料1	B		Ⅷ						接合資料	10.55	10.55	6.4	260.7	
1	B1	I4	Ⅷ	5547	ホルンフェルス	-101,254,550	40,333,248	41,484	剥片	5.2	7.3	2.3	56.8	
2	B1	I3	Ⅷ	5550	ホルンフェルス	-101,256,856	40,332,025	42,061	剥片	5.5	4.1	1.75	32.1	
3	B1	I3	Ⅷ	5551	ホルンフェルス	-101,256,593	40,331,408	42,122	剥片	5.8	7.2	2.3	72.5	
4	B1	I3	Ⅷ	5899	ホルンフェルス	-101,259,887	40,332,371	42,478	剥片	9.35	7	1.7	118.5	

接合資料2

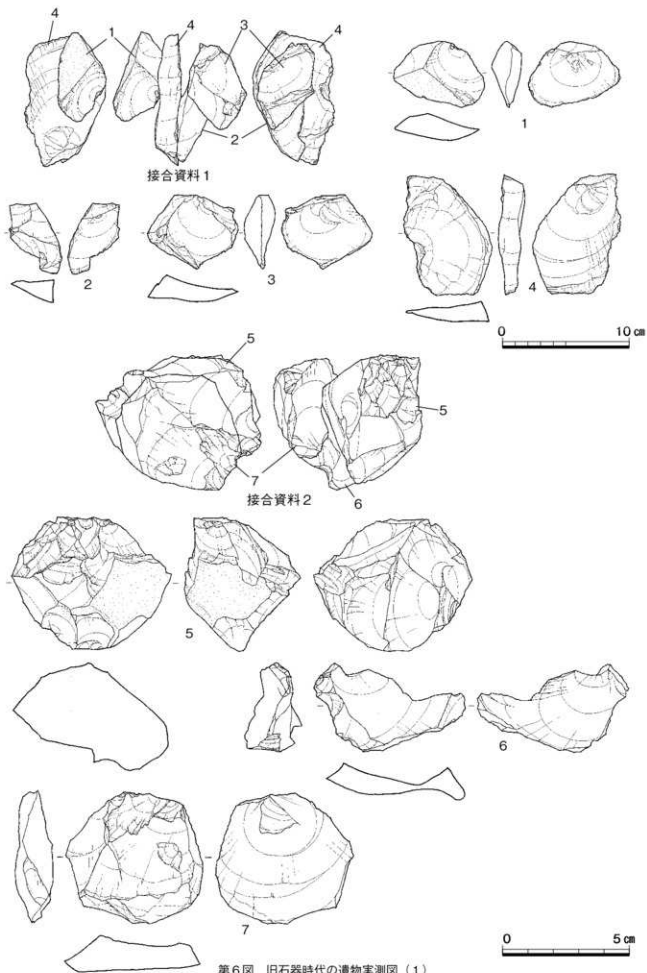
レイアウトNo.	調査区	Gr.	層	取出しNo.	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
接合資料2	B		Ⅷ						接合資料	6.4	5.4	-	180.2	
5	B1	I3	Ⅷ	5552	流紋岩	-101,256,712	40,330,484	42,221	石核	5.2	6.3	4.65	115.8	残核
6	B1	I3	Ⅷ	5549	流紋岩	-101,256,041	40,331,603	41,991	剥片	3.5	6	2.1	22.7	
7	B1	I3	Ⅷ	5895	流紋岩	-101,260,819	40,332,856	42,271	剥片	5.2	5.45	1.5	41.6	

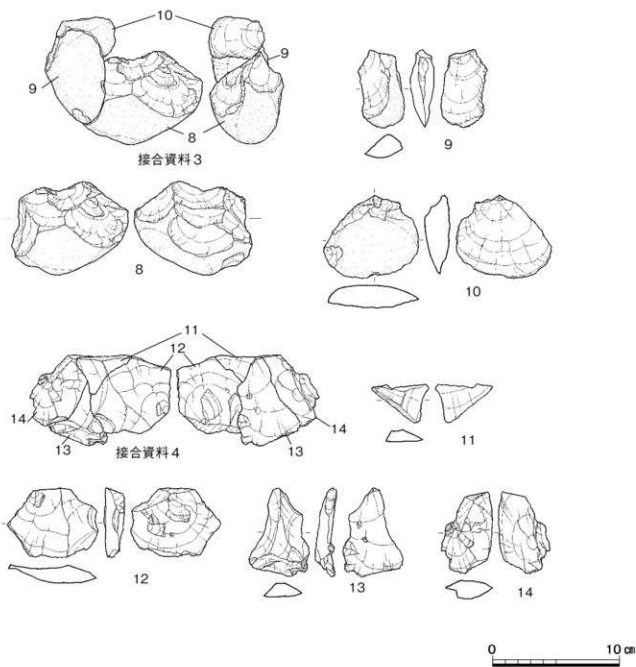
接合資料3

レイアウトNo.	調査区	Gr.	層	取出しNo.	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
接合資料3	B		Ⅷ						接合資料	10.05	12.5	5.9	548.3	
8	B2	D6	Ⅷ	5669	ホルンフェルス	-101,286,401	40,284,328	33,809	石核	9.3	7.1	5.6	414.3	残核
9	B2	D6	Ⅷ	5442	ホルンフェルス	-101,289,476	40,287,251	33,972	剥片	6.1	3.7	1.35	37.2	
10	B2	D6	Ⅷ	5948	ホルンフェルス	-101,291,492	40,284,833	33,965	剥片	6.5	7.55	1.8	96.9	

接合資料4

レイアウトNo.	調査区	Gr.	層	取出しNo.	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
接合資料4	B		Ⅷ						接合資料	7.1	11.2	-	141.7	
11	B1	I3	Ⅷ	5891	ホルンフェルス	-101,263,219	40,328,304	42,355	剥片	6.4	4.05	1.5	38.3	
12	B1	I2	Ⅷ	5978	ホルンフェルス	-101,255,662	40,321,173	42,124	剥片	5.45	7.15	1.5	56.1	
13	B1	H3	Ⅷ	5984	ホルンフェルス	-101,258,884	40,323,374	43,655	剥片	3	4.5	0.95	35.8	
14	B1	H4	Ⅷ	21903	ホルンフェルス	-101,267,000	40,322,940	41,797	剥片	6.95	4.75	1.3	37.8	





第7図 旧石器時代の遺物実測図(2)

【石器】（第10図～第12図、第15図～第39図）

15～22はナイフ形石器である。15～20はⅠ類であり、15・16はⅡ類aに分類され、基部を加工している。石材は15は頁岩で16は流紋岩である。17～20はⅡ類cに分類される。17～19の石材はチャート、20の石材は黒曜石であり、スクレイパーの可能性もある。19・20は下部を欠損している。21・22はⅡ類aに分類され、基部を加工している。石材はいずれも頁岩である。

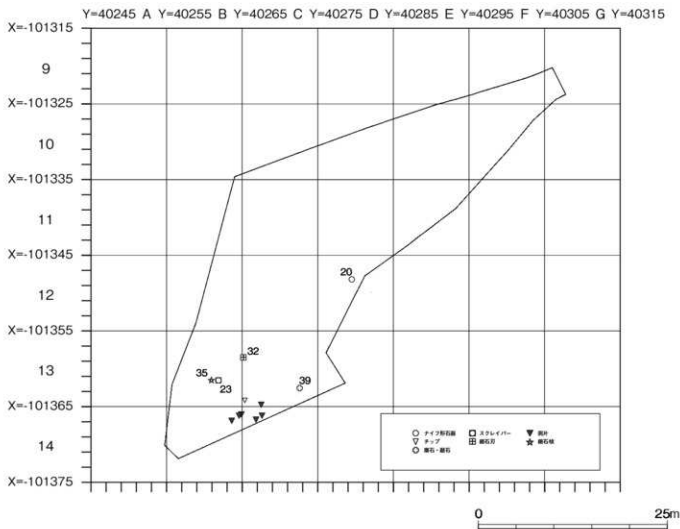
23～24はスクレイパーである。23はサイド・スクレイパーでⅠ類であり、石材は大分県姫島産の黒曜石である。24はエンド・スクレイパーでⅡ類であり、石材はチャートである。

8・25～28は石核である。8は接合資料3を構成する石核であり、Ⅰ類に分類される。25は石材は流紋岩でⅡ類に分類される。26・27はⅢ類に分類される。26の石材はホルンフェルス、27の石材は流紋岩である。28はⅢ類に分類され、石材は流紋岩である。

29～31は使用痕剥片である。いずれも縦長剥片を素材としておりⅠ類に分類される。石材はいずれも流紋岩である。

32～34は細石刃である。石材は32はホルンフェルスであり、33・34は黒曜石である。いずれも下部が欠損している。

35は細石刃核である。石材は黒曜石である。黒曜石の剥片を調整して素材とし、その一定部位に一定



第8図 旧石器時代の遺物分布図(1)(A区)(S=1/500)

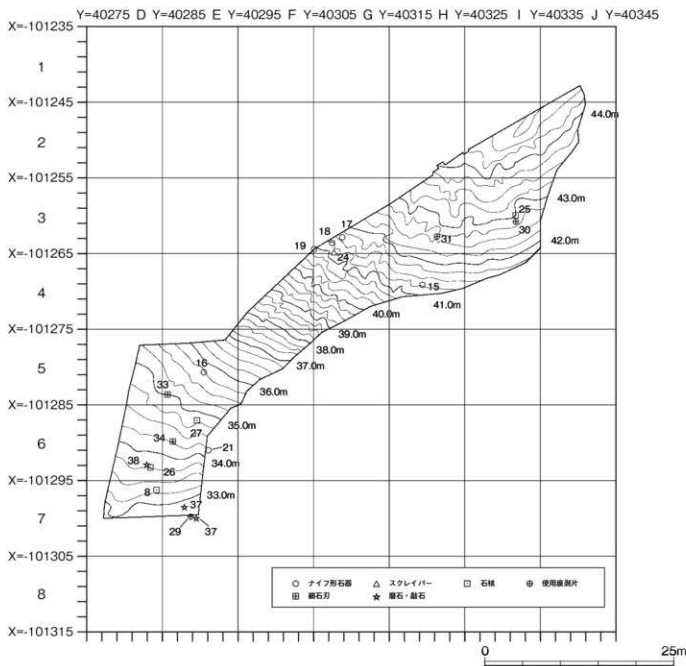
方向の剥片剥離を行っている。

36は敲石である。石材は砂岩でⅡ類に分類される。

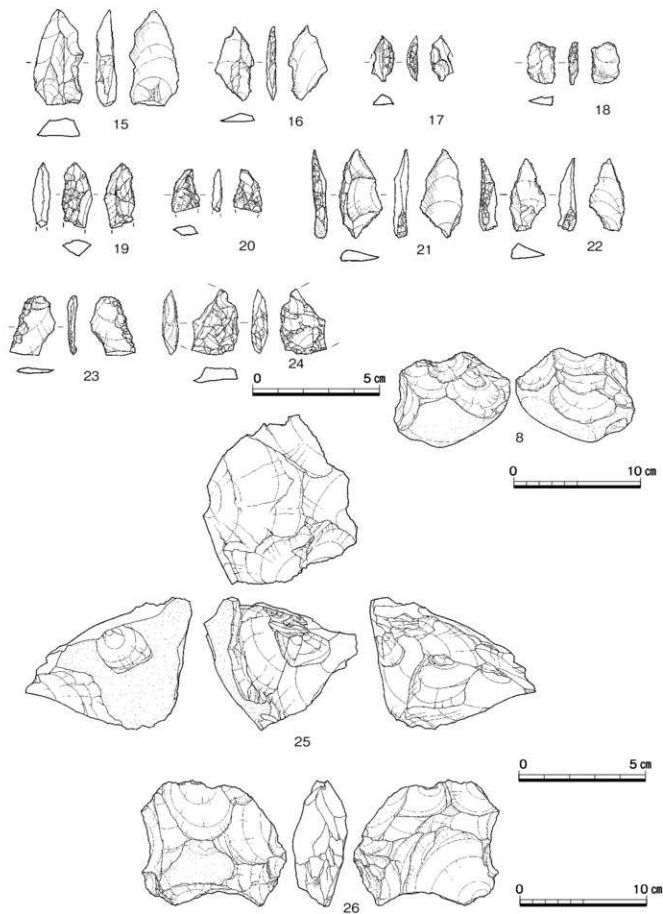
37・38は磨石兼敲石である。石材はいずれも砂岩

であり、Ⅰ類に分類される。

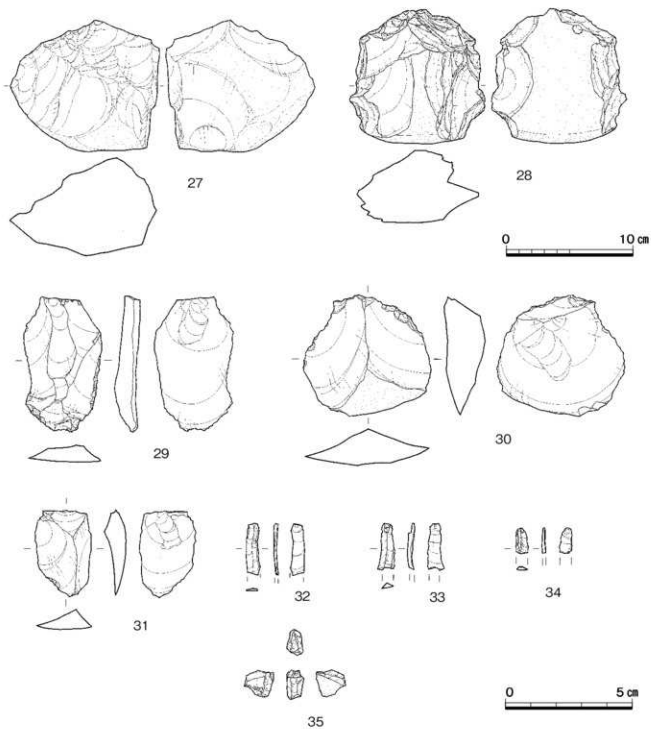
39は磨石である。石材は尾鈴山酸性岩類でⅠ類に分類される。



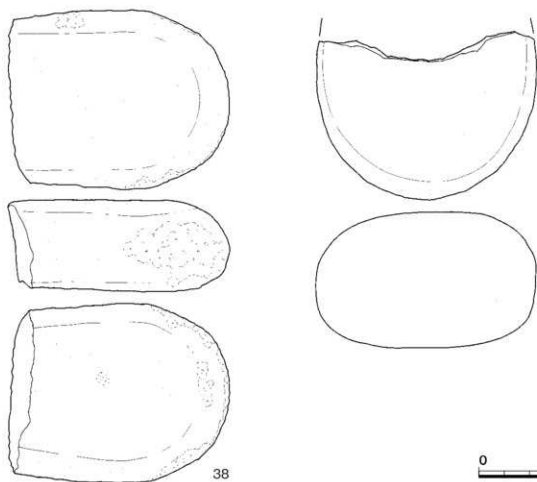
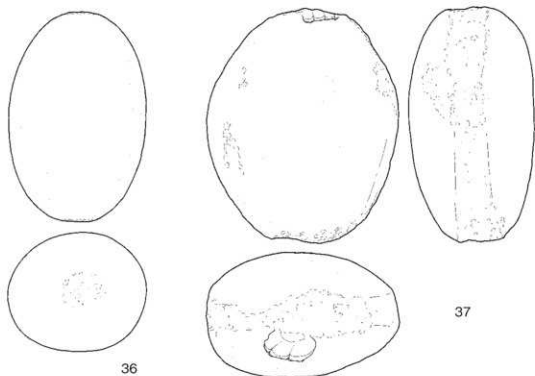
第9図 旧石器時代の遺物分布図(2) (B区) (S=1/500)



第10図 旧石器時代の遺物実測図(3)



第11図 旧石器時代の遺物実測図(4)

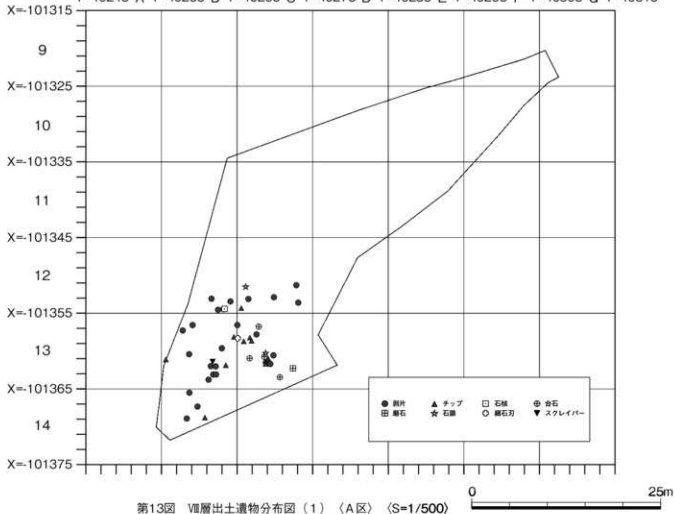


第12図 旧石器時代の遺物実測図(5)

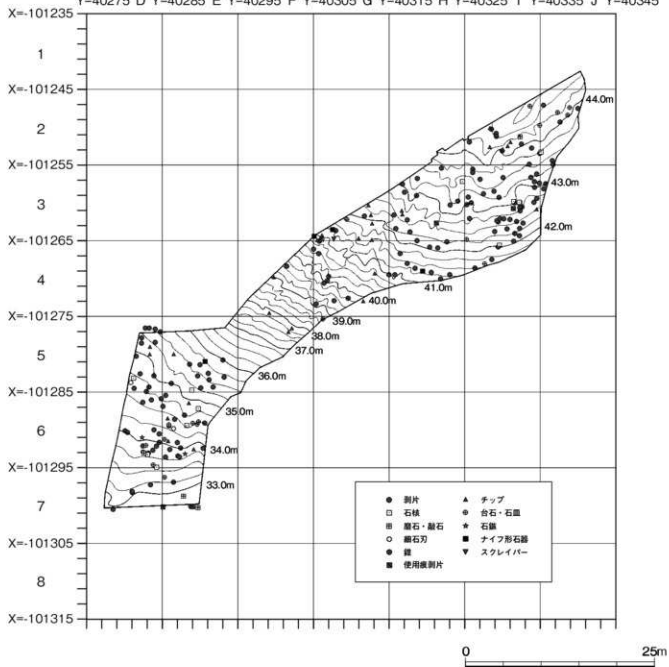
第2表 石器計測表 (旧石器)

レイアウトNo.	調査区	Gr	層	面以上のNo.	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
15	B1	H4	VII	5584	頁岩	-101,269.090	40,319.436	41.421	ナイフ形石器	3.3	1.95	0.85	6.2	
16	B2	E5	VII	5965	流紋岩	-101,280.798	40,290.519	35.337	ナイフ形石器	2.9	1.5	0.4	1.4	
17	B1	G3	VII	5147	チャート	-101,263.837	40,308.740	42.251	ナイフ形石器	1.8	0.9	0.5	0.2	
18	B1	G3	VII	5470	チャート	-101,263.613	40,307.420	42.713	ナイフ形石器	1.65	1.1	0.4	0.8	
19	B1	G3	VII	5460	チャート	-101,264.450	40,305.053	42.184	ナイフ形石器	2.55	1.2	0.7	1.7	
20	A3	E32	II	1282	黒曜石	-101,348.100	40,279.600	25.810	ナイフ形石器	1.7	1.1	0.4	0.6	スクレイパーの同種未製
21	B1	E6	VII	5248	頁岩	-101,291.073	40,291.160	35.076	ナイフ形石器	3.5	1.65	0.55	2.9	
22	B2	-	一括	-	頁岩	-	-	-	ナイフ形石器	2.85	1.4	0.7	2.1	
23	A1	C3	VII	1061	黒曜石	-101,361.504	40,261.916	25.368	ナイフスクレイパー	2.3	1.75	0.35	0.9	鯨島産
24	B1	G3	VII	5459	チャート	-101,264.837	40,307.641	41.846	スクレイパー	2.55	1.85	0.6	3.1	
25	B1	I3	VII	5901	流紋岩	-101,259.884	40,331.761	42.531	石核	5.25	6.05	6.55	170.7	
26	B2	D6	VII	5671	カルクフェルス	-101,293.371	40,283.519	33.942	石核	9.95	11.5	4.2	1075.4	
27	B2	D6	VII	5685	流紋岩	-101,287.155	40,289.640	34.664	石核	10.35	11.8	7.8	553.4	
28	B1	-	VII	-	流紋岩	-	-	-	石核	10.6	10.7	5.7	762.8	
29	B2	E7	VII	5517	流紋岩	-101,300.065	40,288.980	34.154	使用痕跡片	5.35	3.1	0.85	14.6	
30	B1	I3	VII	5904	流紋岩	-101,260.741	40,331.782	42.436	使用痕跡片	4.75	5.1	1.5	31.3	
31	B1	H3	VII	5826	流紋岩	-101,262.705	40,321.334	42.384	使用痕跡片	3.4	2.25	0.8	6.1	
32	A1	B2	VII	951	カルクフェルス	-101,358.389	40,265.215	25.584	巖石刃	2.05	0.56	0.1	0.2	
33	B2	D5	VII	5629	黒曜石	-101,283.713	40,285.727	34.675	巖石刃	1.82	0.7	0.2	0.2	
34	B2	E6	VII	5941	黒曜石	-101,289.936	40,286.464	35.158	巖石刃	1	0.55	0.15	0.1未	
35	A1	C3	VII	1063	黒曜石	-101,361.444	40,261.001	25.257	巖石刃核	1.05	1.2	0.7	0.8	
36	B2	D6	VII	5968	砂岩	-101,300.270	40,289.651	33.931	巖石	8.3	5.4	4.8	300	
37	B2	D6	VII	5957	砂岩	-101,298.676	40,287.974	34.103	磨石準巖石	9.4	7.6	5	498.4	
38	B2	D6	VII	5677	砂岩	-101,293.043	40,283.078	33.908	磨石準巖石	8.7	7.1	3.7	397	
39	A1	C3	VII	1092	尾鈿山酸性岩	-101,362.534	40,272.623	24.731	磨石	6.7	8.7	5.4	438.3	

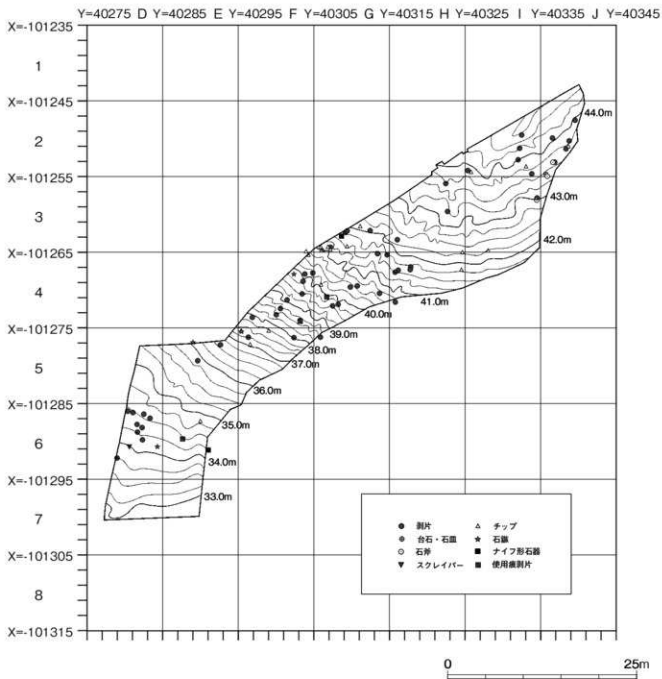
Y=40245 A Y=40255 B Y=40265 C Y=40275 D Y=40285 E Y=40295 F Y=40305 G Y=40315



Y=40275 D Y=40285 E Y=40295 F Y=40305 G Y=40315 H Y=40325 I Y=40335 J Y=40345



第14図 VII層出土遺物分布図(2)(B区)(S=1/500)



第15図 VII層出土遺物分布図 (B区) (S=1/500)

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構として、集石遺構を検出した。畑の平坦部（A区）と丘陵の頂上部（B1区）、丘陵の緩やかな尾根部（B2区）の3箇所それぞれ集石遺構を検出した。いずれもⅦ層中から検出している。遺物は、主にⅦ層とⅧ層の包含層中から出土している。

（1）遺構

畑地のA区で19基、丘陵の頂上部のB1区で13基、丘陵の緩やかな傾斜地であるB2区で10基の合計42基の集石遺構が検出された。いずれもⅦ層中から検出している。検出した集石遺構は第3表にまとめてある。

〔形態分類〕

検出された集石遺構を、以下の3類に分類している。

- Ⅰ類型：掘り込みも配石も無いタイプ
 - Ⅱ類型：掘り込みを持つが、配石を持たないタイプ
 - Ⅲ類型：掘り込みと配石を持つタイプ
- また、構成する礫の集中度によって、以下の3タイプに分類している。
- 密集型：礫が重なり合っているタイプ
 - 集中型：礫がある程度のまとまりをもつタイプ
 - 散在型：礫がまとまりをもたないタイプ

【A区】（第17図）

一次調査では、一次確認調査で集石遺構を確認したトレンチを拡張して礫の広がりを確認した。礫の広がりを確認した後、散礫の礫の取りはずしを行った。その結果、集石遺構を1基（1号集石遺構：SI1）検出した（第24図）。

二次調査では、確認調査（二次）で集石遺構の礫と思われる焼けた礫を調査区の南側で確認した。表土剥ぎ後、Ⅶ層の掘り下げを行い礫の検出を行った。調査区の南側では礫が広がり、散礫として確認された。散礫の礫を取りはずした後、18基の集石遺構（2～19号集石遺構：SI2～SI19）を検出した（第20図～第31図）。

一次調査では1基、二次調査では18基の集石遺構が検出され、合計19基の集石遺構が検出された。集

石遺構の中から押型文土器が数点出土している。A区で検出された集石遺構は、Ⅰ類型が7基（36%）、Ⅱ類型が6基（32%）、Ⅲ類型が6基（32%）に分けられる。礫の集中形態をみると、Ⅰ類型では集中型が2基（11%）、散在型が5基（26%）に分けられる。Ⅱ類型では密集型が1基（5%）、集中型3基（16%）、散在型が2基（11%）に分けられる。Ⅲ類型では密集型が4基（21%）、散在型が2基（11%）に分けられる。

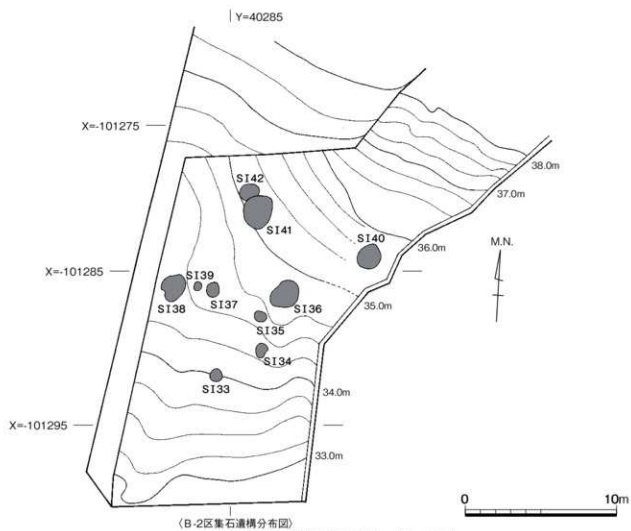
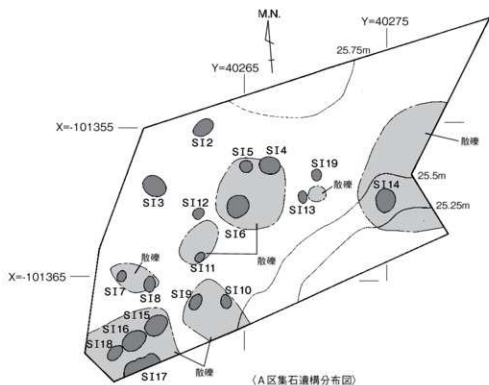
二次調査で検出した集石遺構の礫については、石材の8割以上がホルンフェルスと砂岩が占めており、尾鈴山酸性岩類が極端に少ない。礫の完形率では40%未満のものが7割～9割を占めている。礫の赤化率では、6割～9割が赤化していることがあげられる。

【B区】（第17図、第18図）

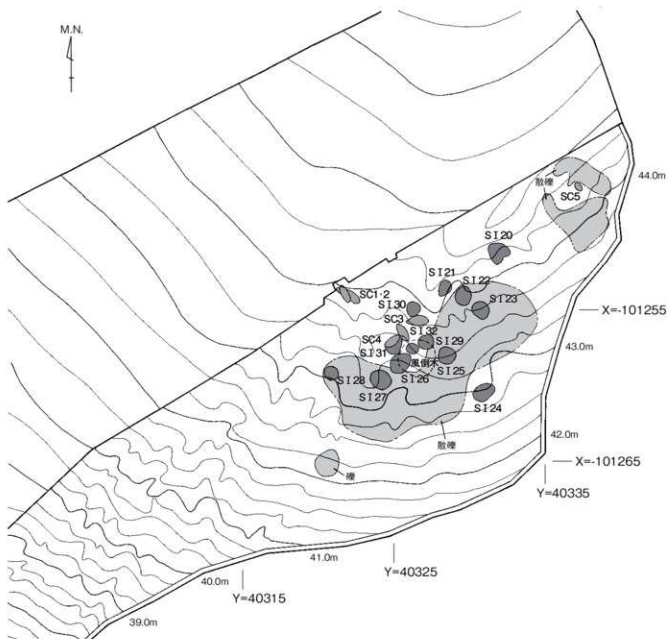
B1区は、確認調査（二次）で、集石遺構の礫と思われる焼けた礫が確認されたので、表土剥ぎ後、Ⅶ層の掘り下げを行い礫を検出した。散礫の礫を取りはずした後、集石遺構を13基検出した（19～32号集石遺構：SI19～SI32）。SI32は尾鈴山酸性岩類と砂岩の大型の礫3個からなり、2個の砂岩は接合できる。位置関係からこの集石遺構の中心となる遺構と考えられる。集石遺構からは土器は出土しておらず、上層の散礫中から貝殻条痕文土器が出土している。B1区の集石遺構の特徴は、全ての集石遺構が配石を持たないという点である。タイプとしては、Ⅰ類型が2基（17%）、Ⅱ類型が10基（83%）に分けられる。礫の集中形態では、Ⅰ類型で密集型が2基（17%）、散在型が3基（25%）に分けられる。Ⅱ類型は集中型が2基（17%）、密集型が6基（50%）に分けられる。

集石遺構の礫については、石材は8割以上がホルンフェルスと砂岩が占め、尾鈴山酸性岩類が極端に少ない。礫の完形率では、40%未満が8割～9割を占める。礫の赤化率では、6割～8割が赤化している。

B2区は、確認調査（二次）では集石遺構の礫は確認されなかったが、重機による表土剥ぎを行った際に、表土である牧草を剥いだ際に焼けた礫が確認

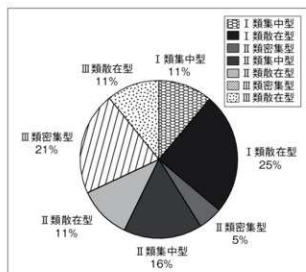
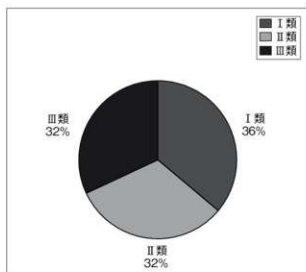


第17図 集石遺構分布図 (1) (S=1/250)

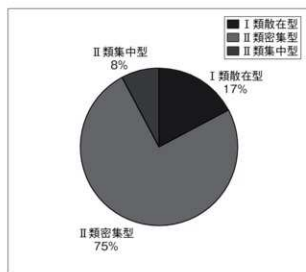
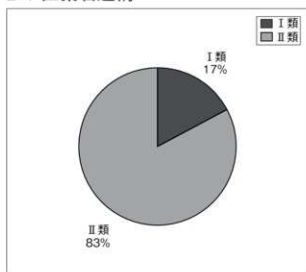


第18図 集石遺構分布図(2) (S=1/250)

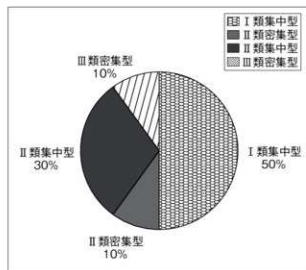
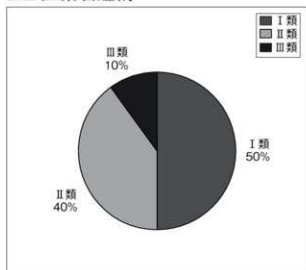
A 区集石遺構



B-1 区集石遺構



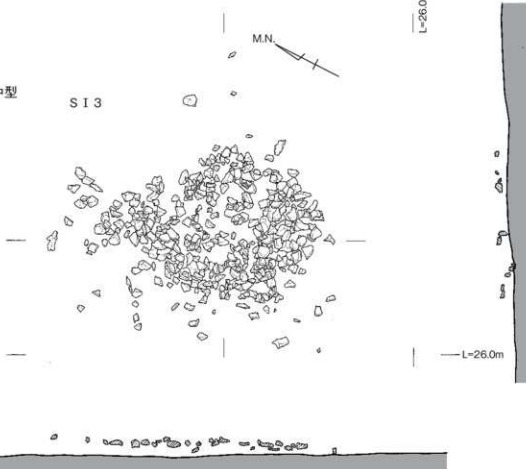
B-2 区集石遺構



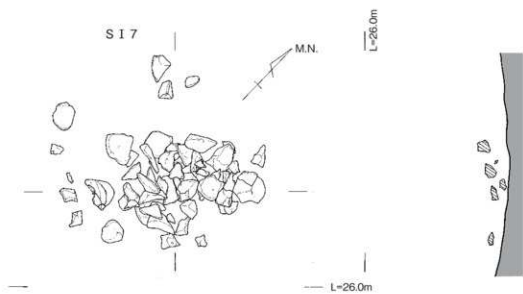
第19図 集石遺構分類グラフ

・I類集中型

S13



S17

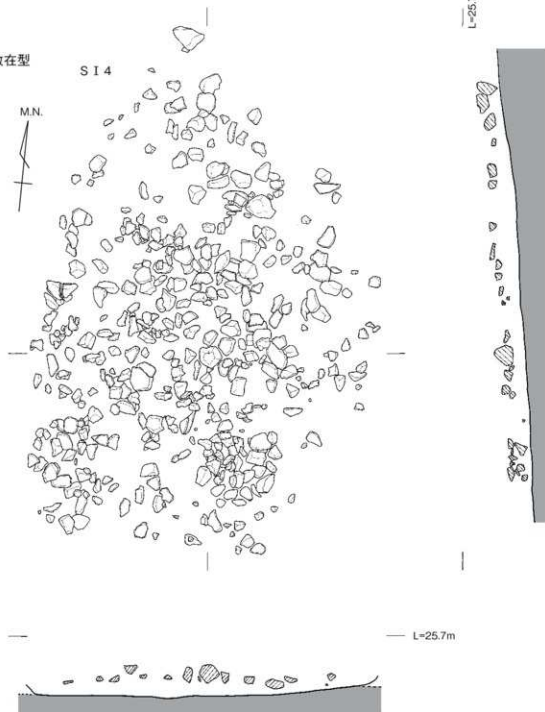


0 1m

第20図 A区集石遺構実測図(1)

・ I類散在型

S I 4



L=25.7m

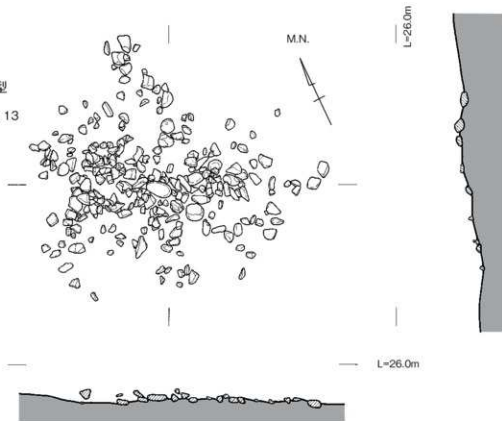
L=25.7m

第21図 A区集石遺構実測図(2)

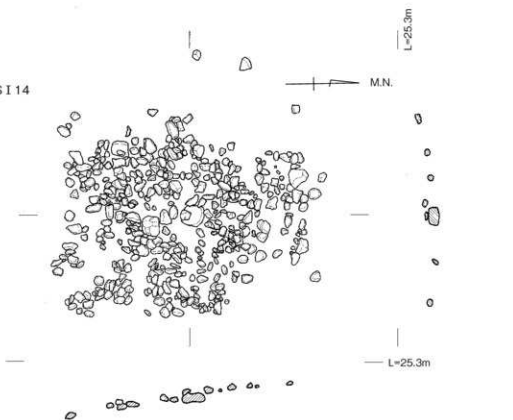
0 1m

・ I 類散在型

SI 13

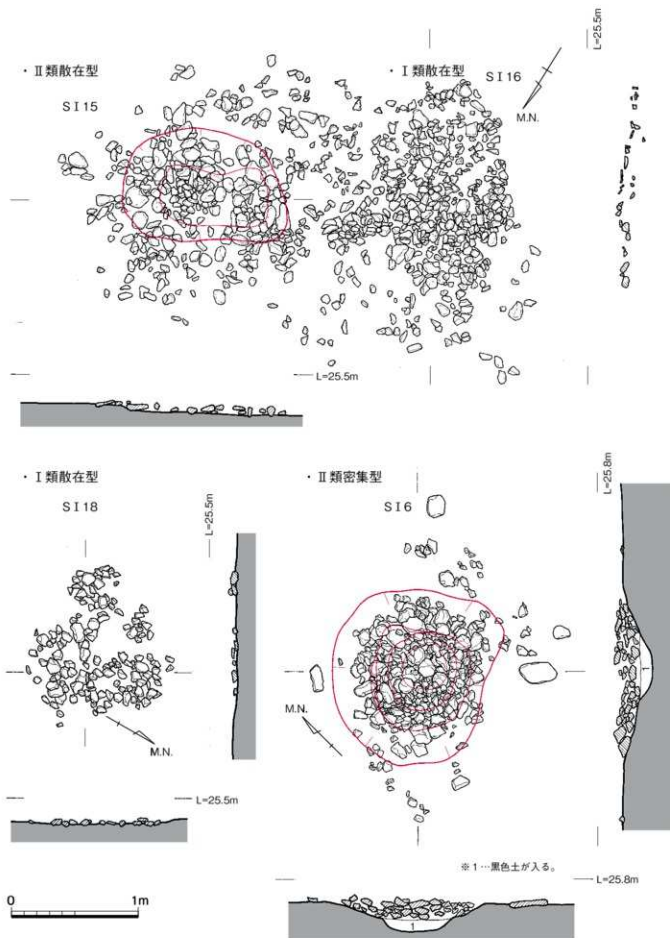


SI 14

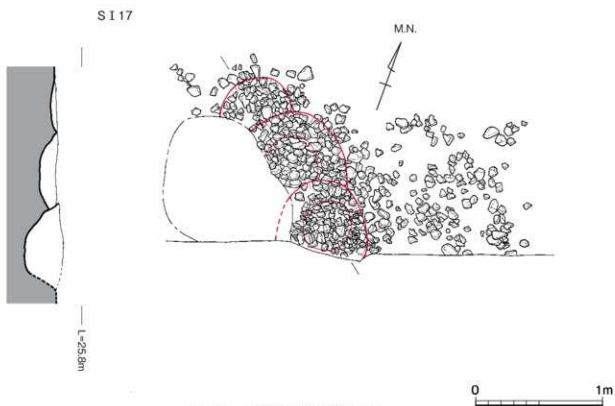
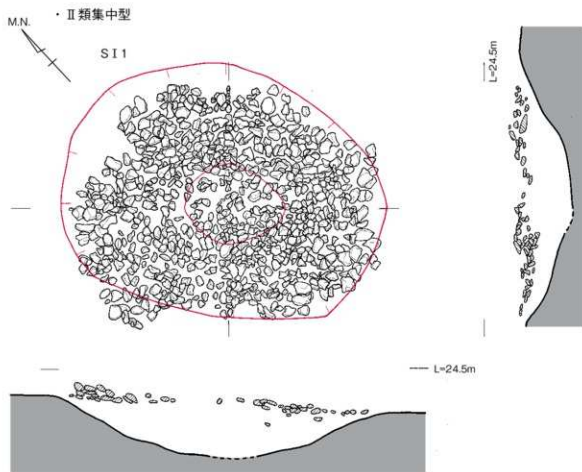


第22図 A区集石遺構実測図(3)



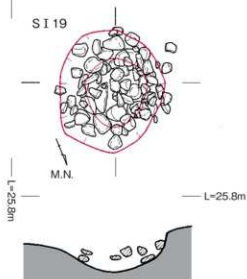


第23図 A区集石遺構実測図(4)

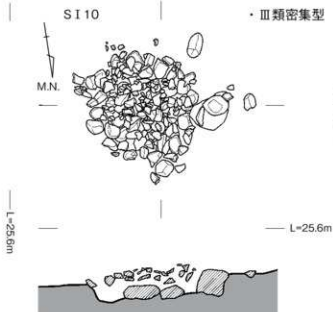
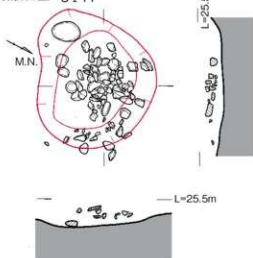


第24図 A区集石遺構実測図(5)

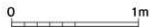
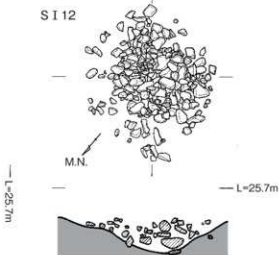
・ II類集中型



・ II類散在型 SI 11



・ III類密集型

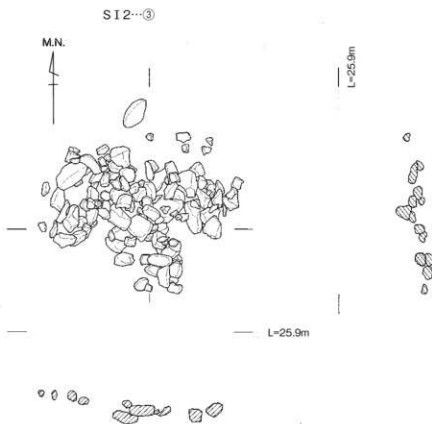
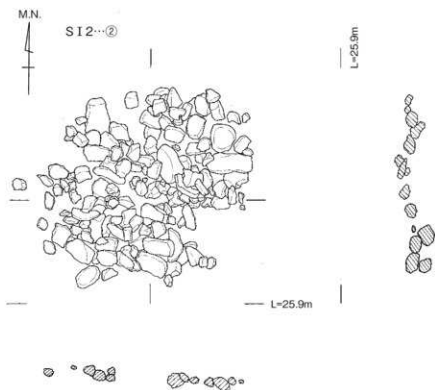


第25図 A区集石遺構実測図(6)

・皿類密集型 (2)

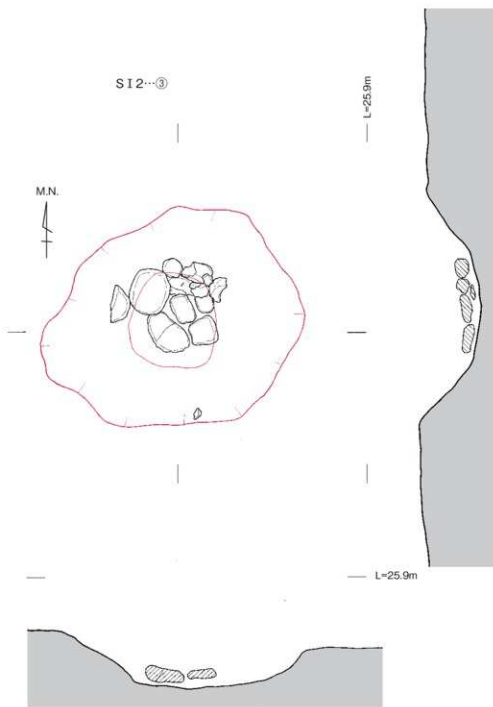


第26図 A区集石遺構実測図 (7)



第27图 A区集石遺構実測図(8)



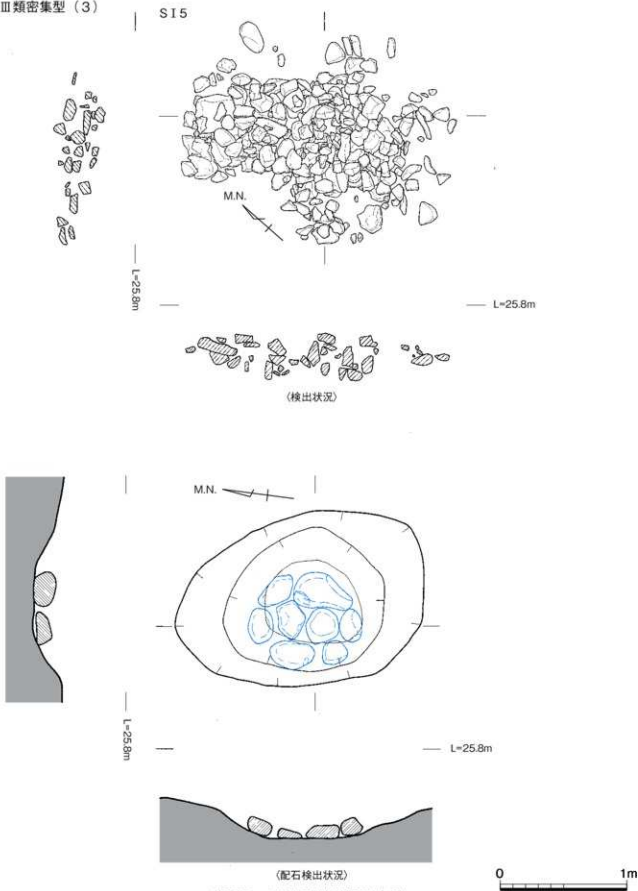


〈配石検出状況〉



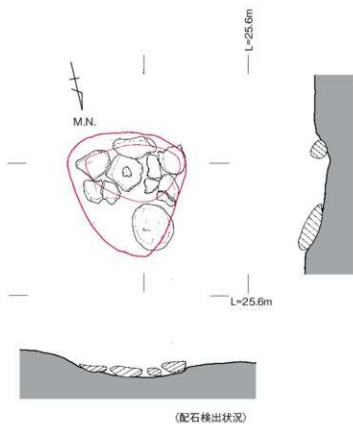
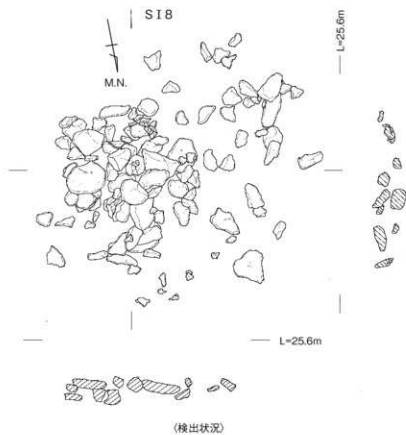
第28図 A区集石遺構実測図(9)

Ⅲ類密集型 (3)



第29図 A区集石遺構実測図 (10)

・Ⅲ類散在型(1)



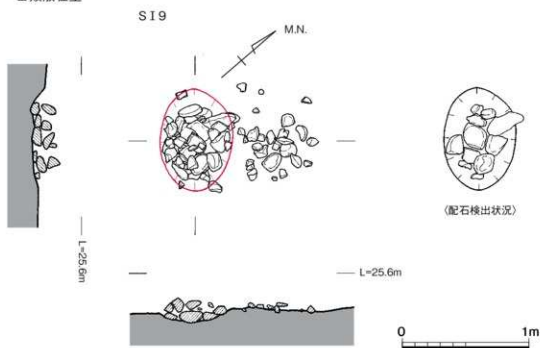
第30図 A区集石遺構実測図(11)

された。B区は牛の放牧場として造成された際に多くが削平されており、集石遺構も上部を失っているものもあり影響を受けている。確認された礫を中心に掘り下げを行い散礫を確認した後、散礫の礫を取りはずした。その結果10基の集石遺構を検出した(33号～42号集石遺構：SI33～SI42)。集石遺構の中から縄文土器の破片が数点出土している。B2区の集石遺構の形態は、I類型が5基(50%)、II類型は4基(40%)、III類型が1基(10%)に分けられる。また礫の集中形態は、I類型は集中型が5基(50%)で、II類型は密集型が1基(10%)、集中

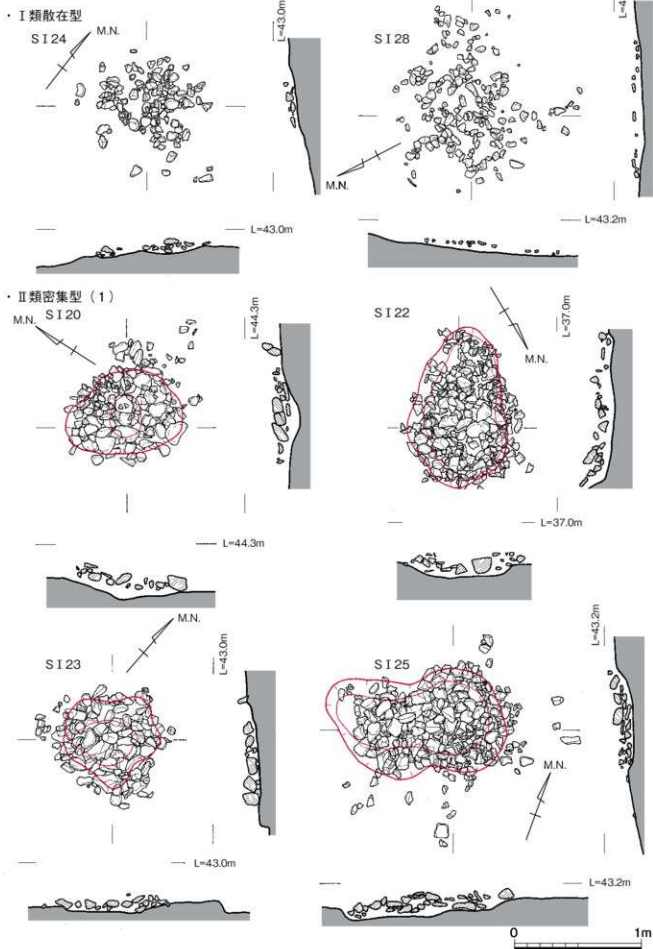
型が3基(30%)、III類型は密集型が1基(10%)に分けられる。

集石遺構の礫について、石材別では8割以上がホルンフェルスと砂岩で占め、ホルンフェルスと砂岩が半々である。礫の完形率では40%未満が8～9割を占める。礫の赤化率では、9割以上が赤化している。

・ III類散在型



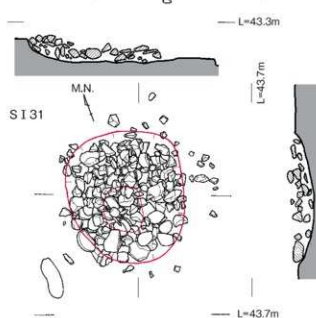
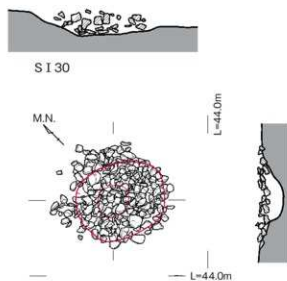
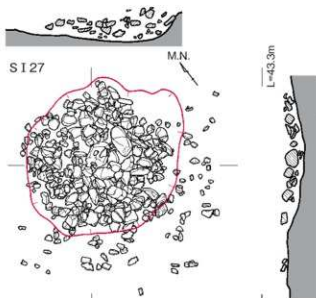
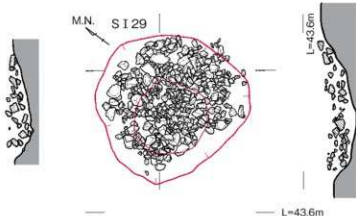
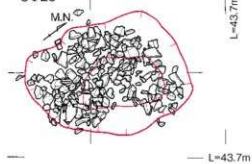
第31図 A区集石遺構実測図(12)



第32図 B-1区集石遺構実測図 (1)

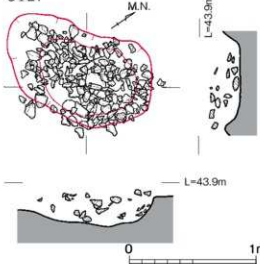
・ II類密集型 (2)

SI 26

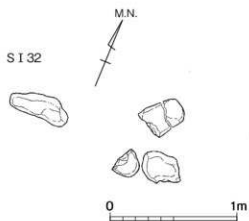


・ II類集中型

SI 21



第33図 B-1区集石遺構実測図 (2)



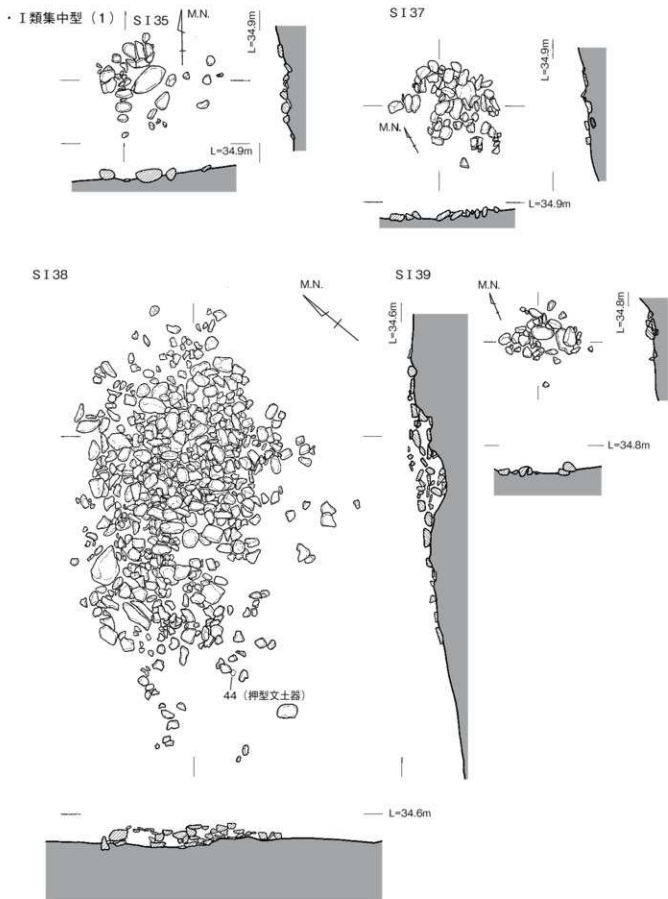
第34図 B-1区集石遺構実測図(3)

第4表 集石遺構分類表

調査区	分類		基数	集石遺構番号	備考
	形態	確密集中度			
A区	I類	密集型	0		
		集中型	2	SI3, SI7	
		散在型	5	SI4, SI13, SI14, SI16, SI18	
	II類	密集型	1	SI6	
		集中型	3	SI1, SI17, SI19	
		散在型	2	SI11, SI15	
	III類	密集型	4	SI2, SI5, SI10, SI12	
		集中型	0		
		散在型	2	SI8, SI9	
B-1区	I類	密集型	0		
		集中型	0		
		散在型	2	SI24, SI28	
	II類	密集型	9	SI20, SI22, SI23, SI25, SI26, SI27, SI29, SI30, SI31	
		集中型	1	SI21	
		散在型	0		
III類	密集型	0			
	集中型	0			
	散在型	0			
B-2区	I類	密集型	0		
		集中型	5	SI35, SI37, SI38, SI39, SI41	
		散在型	0		
	II類	密集型	1	SI40	
		集中型	3	SI33, SI34, SI42	
		散在型	0		
	III類	密集型	1	SI36	
集中型		0			
散在型	0				

※SI32は構成する確数が少なく、中心となる遺構と考えられるので、分類表には入れてない。

第33図 B-1区集石遺構実測図(3)

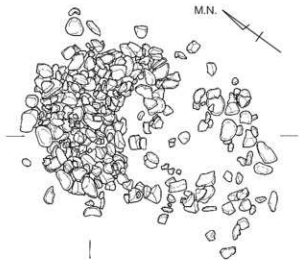


第35図 B-2区集石遺構実測図 (1)

0 1m

・ I類集中型 (2)

SI 141



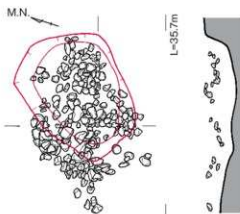
L=35.7m



L=35.7m

・ II類集中型

SI 142



L=35.7m

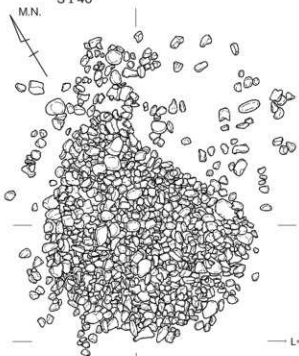


L=35.7m



・ II類密集型

SI 140

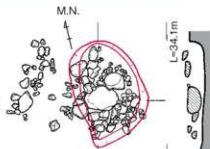


L=35.98m



L=35.98m

SI 133



L=34.1m



L=34.1m



SI 134



L=34.5m

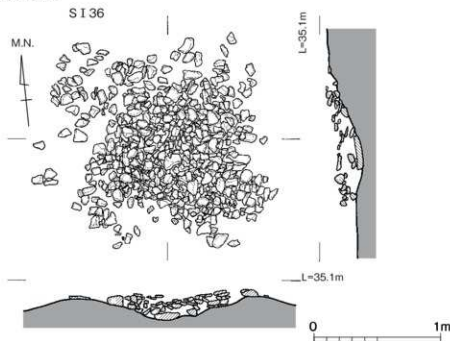


L=34.5m



第36図 B-2区集石遺構実測図 (2)

・Ⅲ類密集型



第37図 B-2区集石遺構実測図(3)

(2) 遺物

遺物は、Ⅳ層のアカホヤ火土灰層で大きく分けている。Ⅳ層の下層から出土したものを早期の遺物としているが、土器は出土層で、石器は出土層と器種によって早期の遺物と判断している。

土器(第40図・第41図)

40~42は貝殻条痕文土器の口縁部である。40は貝殻円筒形土器の口縁から胴部である。胴部は丸みをもっている。口縁部は貝殻による押し引きがみられる。外面は貝殻条痕文を施している。全体的に風化気味で、特に内面の風化が著しく調整は不明瞭である。早期の前平系の桑ノ丸式土器の特徴をもつ。41~42は深鉢の口縁部である。41は口縁部に刻み目突帯を貼付しており、器面調整は内外面とも貝殻条痕後、ナデ調整を行っている。42は口縁部に刻み目を施しており、器面調整は外面に横位や斜位の貝殻条痕文後ナデ調整を行っている。内面は斜位にヘラ後ナデ調整を行っている。

43~44は押型土器の口縁部である。43は胴部から口縁部にかけて屈曲し口縁が外反する深鉢で、口唇部に押型文を施した後、原体条痕を施した後ナデ

調整を行っている。外面には楕円押型文が施されており、口唇部の内面はヘラなどの工具で調整後、ナデ調整を行っており、二条の原体条痕が施されている。内面は横位や斜位にヘラなどの工具で調整後ナデ調整を行っている。押型文土器の田村式土器とみられる。44は口縁部は直口しており、口唇部と内面にミガキを施している。外面はナデ調整後絞形押型文を施している。穿孔があり、外面から内面にかけ孔は小さくなり貫通している。

45~47は孔列文土器の口縁部であり、47のみ貫通している。45は内外面ともナデ調整を施している。46は口唇部を貝殻条痕後ナデ調整を行っており、外面はヘラ後ナデ、内面は貝殻条痕後ナデ調整を行っている。47は内外面とも貝殻条痕後ナデ調整を行っている。46・47は二孔が対で穿孔されているとみられる。出土地点が丘陵部の斜面とA区の落ち込んでいる箇所であらうとみられる。時期は縄文時代晩期の孔列文土器と思われる。

48~50は貝殻条痕文土器の胴部である。48は深鉢の胴部であり、内外面とも貝殻条痕後ナデ調整を行っている。外面にわずかにスガが付着している。49は胴部で張り出し部分である。器面調整は内外面とも

ナデである。外面に部分的にススが付着している。

50は浅鉢の胴部であり、器面調整は内外面ともヨコナデ後ミガキが施されている。

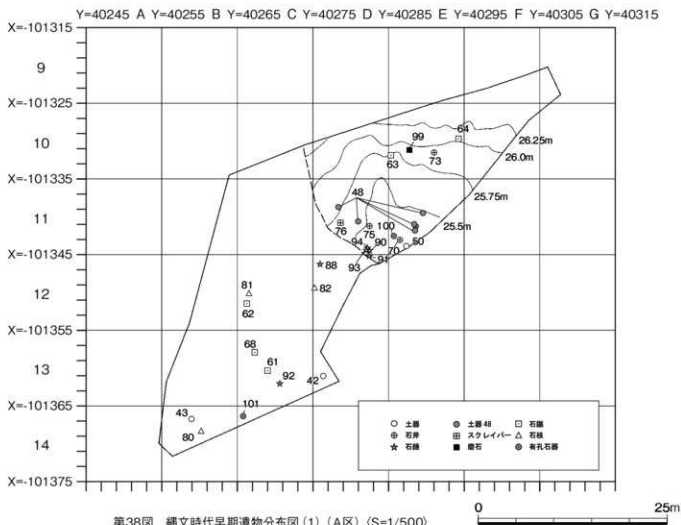
51～53は底部である。51は深鉢の胴部から底部であり、外面は貝殻痕文を施した後ナデ調整を行っている。内面はナデであるが風化気味である。底部はナデ後ミガキが施されている。52は深鉢の底部であり、内外面はナデ調整で、外面に部分的にミガキが施されている。底部はナデ後ミガキが施されている。53は深鉢の底部であり、内外面ともナデている。内面の底部付近に指押さえがみられ、底部の端部が張り出している。

石器 (第42図～45図)

54～69は石鏃である。54～60の形態はⅠ類に分類される。54はⅠ類aに分類され、石材は黒曜石である。55～60はⅠ類bに分類される。55・57・59・60の石材は黒曜石であり、56・58の石材はチャートである。61～68はⅡ類bに分類される。61・65～68の石材は黒曜石である。62～64の石材は流紋岩である。69はⅢ類に分類され、石材は黒曜石である。

70～75は石斧である。70～74は打製石斧で、75は磨製石斧である。石材はいずれもホルンフェルスである。

76～78はスクレイパーである。76はエンド・スク



レイバーでⅠ類に分類される。石材は鹿児島県日東産の黒曜石である。77・78はサイド・スクレイパーでⅡ類に分類される。77・78の石材は流紋岩である。

79は石錐である。石材は頁岩で、先端を欠損している。

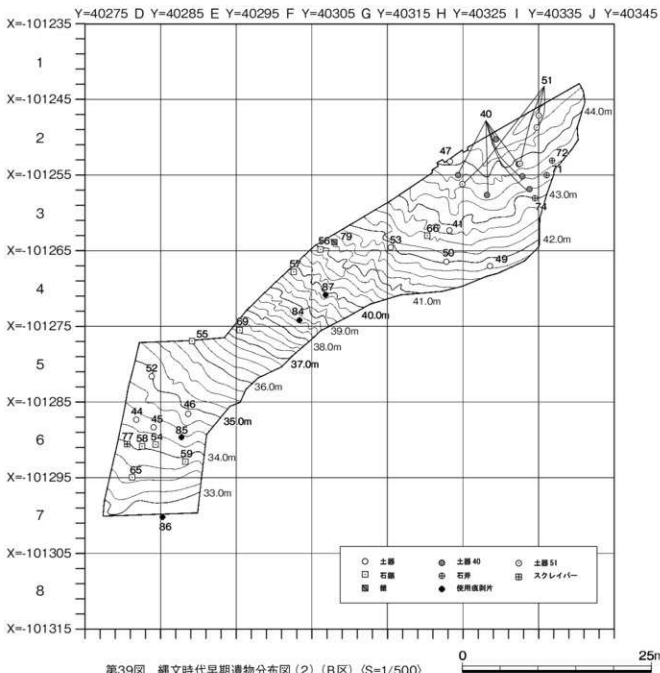
80～82は石核である。80はⅠ類に分類され、石材はホルンフェルスである。81・82はⅡ類に分類され、81の石材はホルンフェルスであり、82の石材は黒曜石である。

83～87は使用痕剥片である。83～86はⅠ類に分類

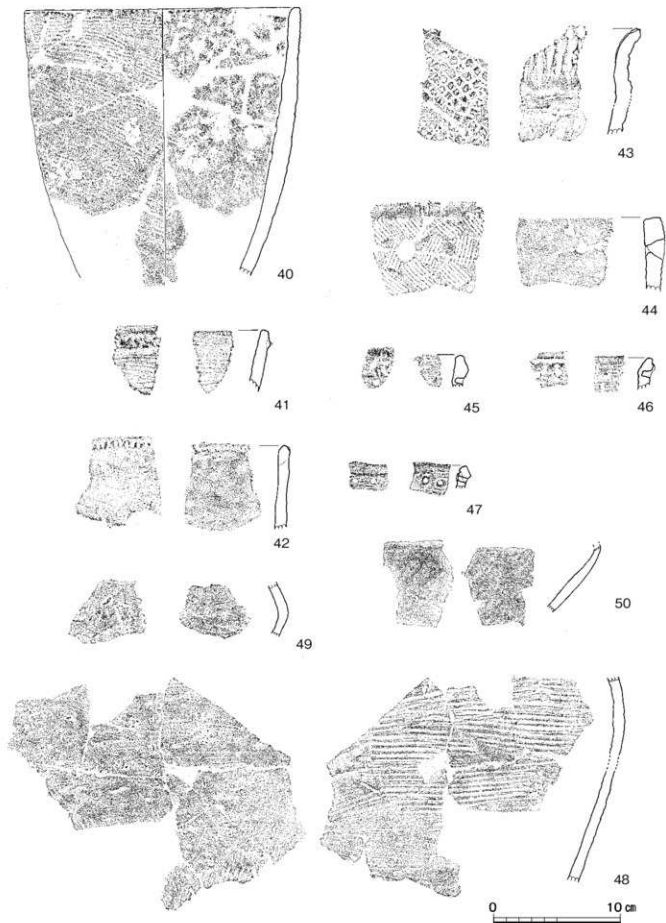
される。83の石材は黒曜石であり、84～86の石材は流紋岩である。87はⅡ類に分類され、石材は流紋岩である。

88～95は石錐である。いずれも丸石の両端に縄掛け用の切り込みを施した切目石錐である。石材はいずれも砂岩である。

96は敲石である。Ⅱ類に分類され、石材は砂岩である。集石遺構を検出したA区の散濺中から出土した。



第39図 縄文時代早期遺物分布図(2)(B区)(S=1/500)

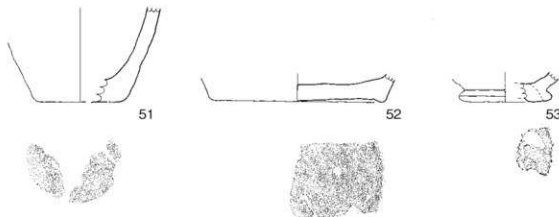


第40図 縄文時代早期の遺物実測図(1)

97~99は磨石である。いずれもI類に分類され、石材は尾鈴山酸性岩類である。

100~101は有孔石器である。加工はみられないが

自然に孔が空いている石を持ち込んでいるとみられる。用途は不明である。石材は100がノジュール、101が砂岩である。

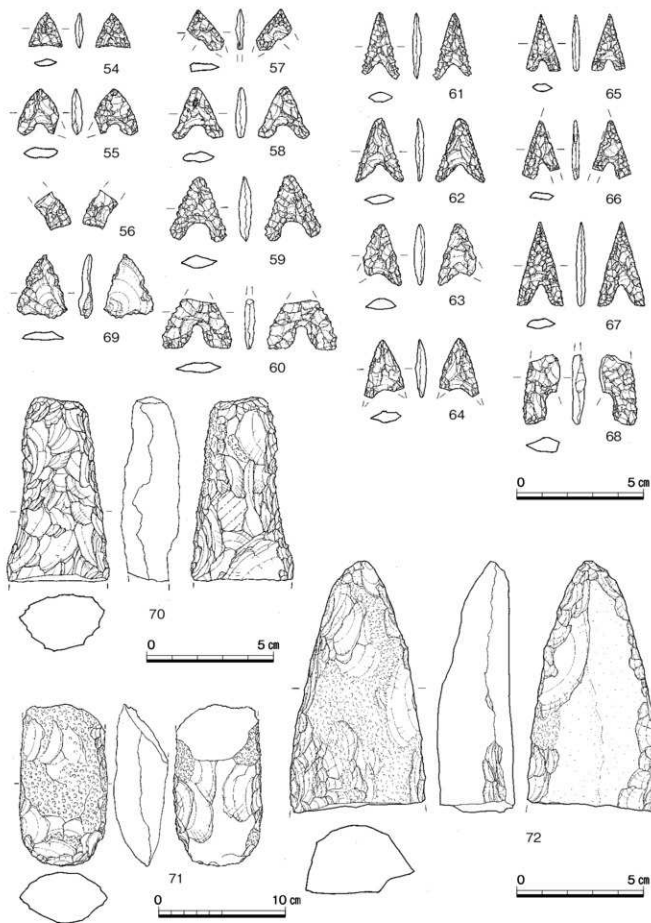


第41図 縄文時代早期の遺物実測図(2)

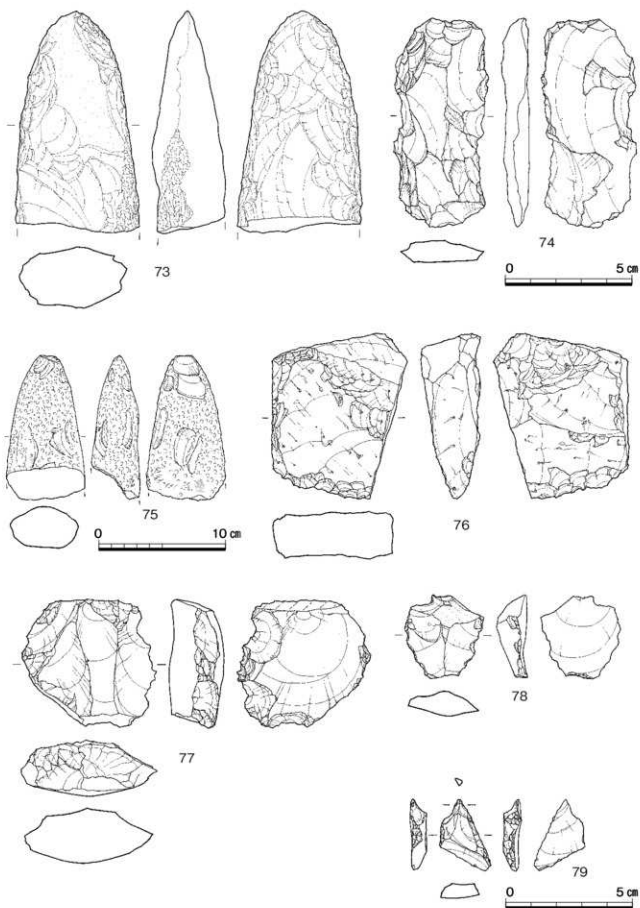
0 10 cm

第5表 土器観察表①

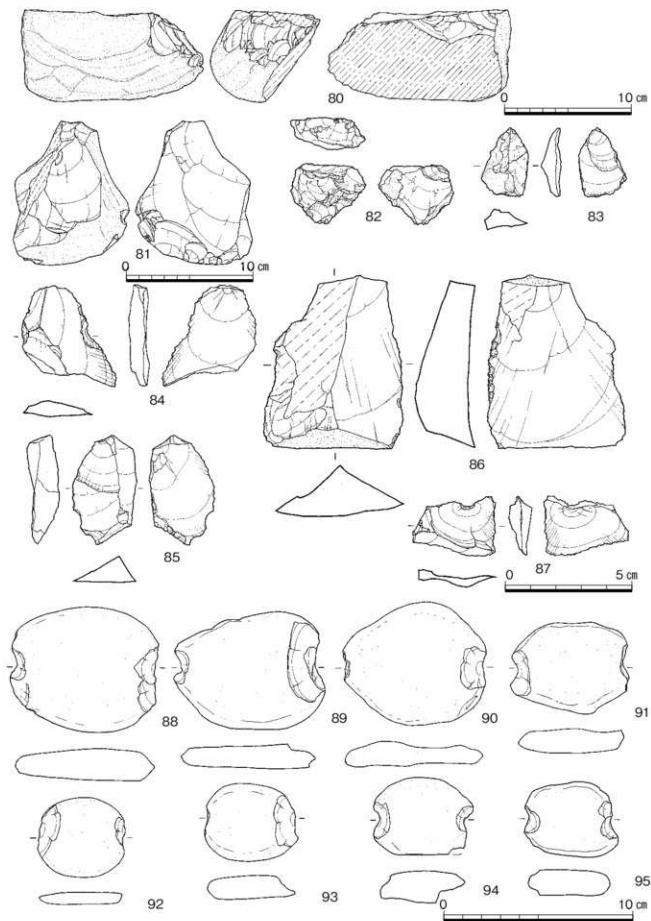
番号	種別	出土区	器種	部位	数量	重量 口径 底径 器高	焼成	文様及び調整		色調		胎土	備考
								外面	内面	外面	内面		
40	縄文土器	B区	円盤土器	口縁~胴部	21.7		良好	口縁部に貝殻による押し引き、貝殻条痕、全体的に黒化現象。	黒化が著しく調整が不明瞭。	にぶい黄褐色(10YR7/4)	褐色(10YR5/1)	1mm以下の黒色粒。1mm以下の乳白色粒。微細な黒色透明光沢粒。1mm以下の赤褐色粒を含む。	鼻ノ丸式
41	縄文土器	B区	深鉢	口縁			良好	口縁部に斜み割突等、貝殻条痕の後ナデ。	貝殻条痕の後、ナデ。	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	3mm以下の赤褐色粒。2mm以下の乳白色粒。2mm以下の黒褐色粒。微細な黒色透明光沢粒を含む。	
42	縄文土器	B区	深鉢	口縁			良好	横方向や斜方向の貝殻条痕後ナデ。	斜方向にヘラ後、ナデ。	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の透明光沢粒。2mm以下の褐色粒を含む。2mm以下の灰白色粒を少し含む。2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。	
43	縄文土器	B区	深鉢	口縁			良好	口縁部押し型文後、厚体条痕後ナデ。横内押型文。	ヘラや工具などの調整後ナデ。横二条の厚体条痕。横方向や斜方向にヘラや工具などで調整後、ナデ。	にぶい黄褐色(10YR6/4)	褐色黄(2.5Y5/2)	5mm以下の灰白色粒を多く含む。3mm以下の乳白色粒。3mm以下の赤褐色粒を含む。2mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。1mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。	横内押型文土器 田村式
44	縄文土器	B区	深鉢	口縁			良好	口縁部ミガキ有り。ナデ押型押し型文。穿孔有り(貫通)。	ヨコナデ。ミガキあり。	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	2mm以下の黒色透明光沢粒。1mm以下の黒色光沢粒。1mm以下の乳白色粒。5mm以下の灰褐色粒を含む。	縁部押し型文土器
45	縄文土器	B区	口縁				良好	穿孔有り。ナデ。	ナデ。	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mm以下の透明光沢粒を多く含む。2mm以下の灰白色粒を含む。1mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む。1mm以下の赤褐色粒をこわずかに含む。	
46	縄文土器	B区	口縁				良好	穿孔有り。ヘラ後ナデ。口縁部は貝殻条痕後ナデ。	貝殻条痕の後、ナデ。	浅黄褐色(10YR8/3)	灰白(2.5Y5/2)	5mm以下の褐色粒を多く含む。3mm以下の灰褐色粒。乳白色粒を含む。1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。2mm以下の透明褐色の光沢粒をこわずかに含む。	
47	縄文土器	B区	口縁				良好	穿孔有り(貫通)。貝殻条痕後ナデ。	貝殻条痕の後、ナデ。	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	3mm以下の灰白色粒を多く含む。1mm以下の透明光沢粒を含む。1mm以下の褐色粒をこわずかに含む。	
48	縄文土器	A区	深鉢	胴部			良好	横方向や斜方向の貝殻条痕後ナデ。わずかにス付筋。	横や斜方向に貝殻条痕後ナデ。	にぶい黄(2.5Y5/4)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	3mm以下の赤褐色粒を多く含む。3mm以下の灰褐色粒。2mm以下の灰白色粒を含む。1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。1mm以下の黒色光沢粒をこわずかに含む。	
49	縄文土器	B区	胴部(深鉢部)				ナデ。部分的にス付筋。	ナデ。	にぶい黄褐色(10YR6/4)	灰(5Y6/1)	1mm以下の乳白色粒。2mm以下の灰褐色粒。微細な黒色透明光沢粒を含む。	胴部が張り出す	
50	縄文土器	A区	浅鉢	胴部			良好	ヨコナデ後ミガキ。	ヨコナデ後ミガキ。	にぶい赤褐色(5YR5/4)	にぶい赤褐色(5YR5/4)	微細な赤褐色粒。微細な光沢粒を多く含む。3mm以下の灰白色粒を含む。1mm以下の灰白色粒を含む。	
51	縄文土器	B区	鉢	胴部~底部	5.6		良好	貝殻条痕後ナデ。部分的にミガキ。底部ナデ後ミガキ。	ナデ。黒化現象。	明黄褐色(10YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	1mm以下の透明光沢粒。1mm以下の黒褐色粒を含む。1mm以下の乳白色粒をわずかに含む。	
52	縄文土器	B区	深鉢	底部	13.4		良好	ナデ後ミガキ。	ナデ。	明褐色(10YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	2mm以下の透明光沢粒を多く含む。2mm以下の黒褐色粒を含む。	
53	縄文土器	B区	鉢	底部	5.5		良好	ナデ。	ナデ。指押さへ。	浅黄(2.5Y7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	2mm以下の褐色粒を多く含む。黒褐色粒を含む。灰白色粒を少し含む。透明光沢粒をこわずかに含む。	



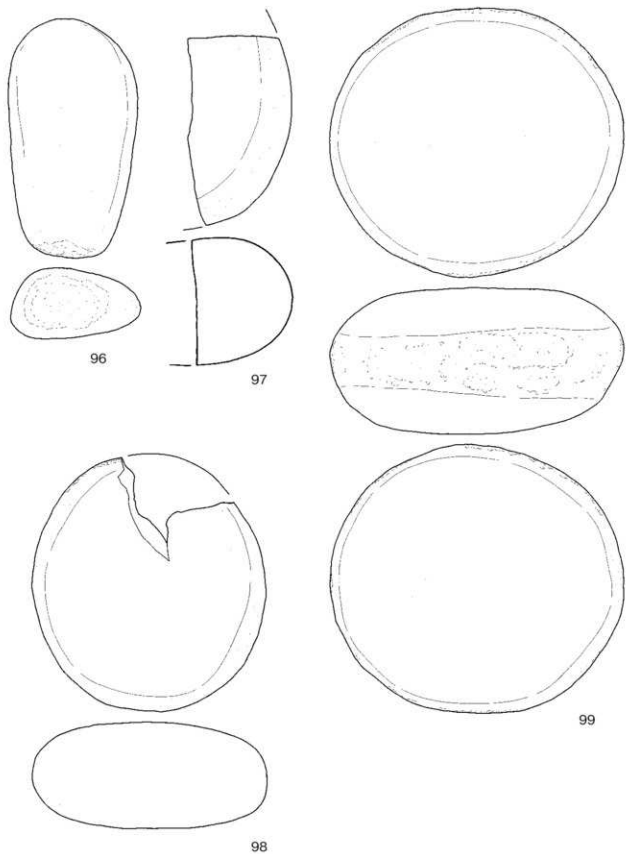
第42図 縄文時代早期の遺物実測図 (3)



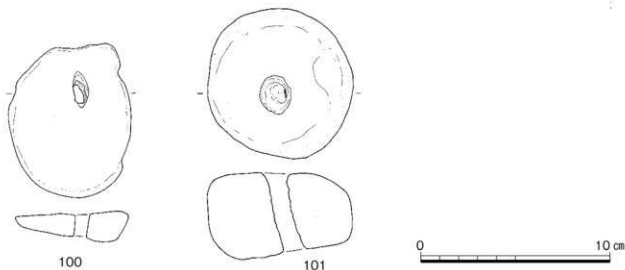
第43図 縄文時代早期の遺物実測図 (4)



第44図 縄文時代早期の遺物実測図(5)



第45図 縄文時代早期の遺物実測図 (6)



第46図 縄文時代早期の遺物実測図(7)

第6表 石器計測表(縄文時代)

レイアウトNo.	調査区	Gr.	層	取り上げNo.	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
54	B1	D	6	V	5331	黒曜石	-101,290,613	40,284,175	34,043	石鏃	1.3	1.3	0.3	0.4	
55	B2	E	5	V	5376	黒曜石	-101,276,863	40,288,971	35,433	石鏃	1.8	1.6	0.4	1	
59	B1	G	5	V	5226	黒曜石	-101,275,437	40,295,452	36,411	石鏃	1.6	1.9	0.5	1.6	
56	B1	G	3	V	5464	チャート	-101,264,854	40,306,017	42,735	石鏃	1.5	1.6	4.5	0.6	欠損
57	B1	F	4	V	5159	黒曜石	-101,267,782	40,302,440	39,492	石鏃	1.6	1.45	0.3	0.5	
58	B2	D	6	V	5697	チャート	-101,290,858	40,282,431	34,456	石鏃	2	2	0.4	1.3	
59	B1	E	6	V	5640	黒曜石	-101,292,907	40,288,120	34,980	石鏃	2.55	2.2	0.5	2	
60	B2	D	5	V	5682	黒曜石	-101,294,925	40,281,213	35,125	石鏃	2	2.75	0.4	2	
61	A1	B12	V	773	黒曜石	-101,360,367	40,268,975	25,461	石鏃	2.6	1.5	0.35	0.7	磨蝕面	
62	A1	C12	V	765	流紋岩	-101,351,532	40,266,259	25,736	石鏃	2.5	1.8	0.3	1		
63	A2	E10	II	32	流紋岩	-101,331,837	40,285,274	26,971	石鏃	2.4	1.5	0.4	1.2		
64	A2	E10	II	901	流紋岩	-101,329,716	40,284,196	25,862	石鏃	2.25	1.5	0.4	1.1		
65	B2	D	5	一括	5628	黒曜石	-101,255,573	40,368,735	35,538	石鏃	2.2	1.3	0.4	0.6	
66	B2	H	4	一括	5374	黒曜石	-101,262,938	40,320,238	43,222	石鏃	2.3	1.45	0.3	0.7	
67	B1	-	-	一括	-	黒曜石	-	-	-	石鏃	3.3	1.85	0.35	1.6	
68	A1	B13	I	85	黒曜石	-101,357,919	40,267,332	25,795	石鏃	2.75	1.45	0.55	1.8		
70	A2	E11	II	797	ホルンフェルス	-101,343,028	40,286,476	25,803	石斧	7.3	4	2.2	81.8		
71	B1	J	2	V	5013	ホルンフェルス	-101,254,982	40,336,046	44,137	石斧	12.75	7	4.3	490.9	
72	B1	J	2	V	5011	ホルンフェルス	-101,253,096	40,336,704	43,787	石斧	9.9	5.3	3	198.7	
73	A2	D10	II	329	ホルンフェルス	-101,331,481	40,290,960	26,519	石斧	8.75	4.9	2.8	152.5		
74	B1	I	3	V	5076	ホルンフェルス	-101,258,107	40,334,459	42,382	石斧	8.25	3.8	1.1	41.6	
75	A3	E11	II	1265	ホルンフェルス	-101,341,200	40,282,400	26,085	石斧	1.3	6.2	3.8	325.7		
76	A3	E11	II	1385	黒曜石	-101,340,800	40,278,600	26,278	スクレイパー	6.5	5.4	2.4	91.6	鹿児島県日豪産、石核又は剥片をスクレイパーに転用	
77	B1	D	6	V	5256	流紋岩	-101,290,597	40,280,447	33,859	スクレイパー	4.95	5.3	2.2	70.3	
78	B	-	-	一括	-	流紋岩	-	-	-	スクレイパー	3.3	3.1	1.2	1.0	
79	B1	G	3	V	5469	頁岩	-101,263,756	40,307,848	42,646	鏃	2.8	2	0.65	3.2	
80	A1	B14	III	305	ホルンフェルス	-101,368,254	40,260,254	25,272	石核	7.3	14.5	9.2	1202		
81	A1	B13	IV	98	ホルンフェルス	-101,350,081	40,266,476	25,796	石核	11.3	9.25	3.65	465.1		
82	A3	E12	III	1529	黒曜石	-101,349,300	40,275,200	25,816	石核	2.35	3	1.3	8.5		
83	B	-	-	一括	-	黒曜石	-	-	-	使用剥片	2.7	1.9	0.8	2.4	
84	B1	F	4	V	5221	流紋岩	-101,274,066	40,303,248	36,461	使用剥片	4	3.7	0.8	9.1	
85	B1	E	6	V	5255	流紋岩	-101,289,626	40,287,578	34,039	使用剥片	4.3	2.55	1.3	10	
86	B2	D	6	V	5967	流紋岩	-101,300,101	40,285,096	34,001	使用剥片	6.85	5.5	2.1	74.7	
87	B1	G	4	V	5198	流紋岩	-101,270,827	40,306,707	37,963	使用剥片	2.35	3.3	0.9	3.8	
88	A3	E12	III	1344	砂岩	-101,346,200	40,275,900	26,305	石鏃	6.6	7.8	1.8	123.9		
89	A3	-	-	一括	-	砂岩	-	-	-	石鏃	6.3	8	1.3	89.3	
90	A3	E11	III	1473	砂岩	-101,344,300	40,282,400	25,582	石鏃	6.6	7.5	1.4	78.2		
91	A3	E11	III	1210	砂岩	-101,345,100	40,282,400	25,807	石鏃	4.8	5.8	1.3	63.4		
92	A1	B13	IV	113	砂岩	-101,362,002	40,270,591	25,734	石鏃	4.2	4.6	0.6	19.7		
93	A3	E11	III	1471	砂岩	-101,344,100	40,282,100	25,696	石鏃	4.2	4.9	1.2	35.3		
94	A3	E11	III	1472	砂岩	-101,344,300	40,282,000	25,522	石鏃	4.2	5.3	1.8	41.6		
95	A2	-	-	一括	-	砂岩	-	-	-	石鏃	4	5	1.3	36.9	
96	A1	-	-	-	-	砂岩	-	-	-	磨石	9.4	5.1	3.8	177.2	数個中
97	A1	-	-	-	-	尾鈎山酸性岩	-	-	-	磨石	(13.1)	(4.1)	(5)	235.8	S 15 (1/4 残存)
98	B2	-	-	-	-	尾鈎山酸性岩	-	-	-	磨石	10.1	9.3	4.2	500.5	S 16
99	A2	D10	IV	710	尾鈎山酸性岩	-101,331,144	40,287,709	26,148	磨石	11.6	10.5	5.8	1130		
100	A2	E11	II	816	ノジュール	-101,342,526	40,285,646	25,649	穿孔石鏃?	8	7.8	5	415.3		
101	A1	C13	IV	1049	砂岩	-101,366,331	40,265,805	24,780	穿孔石鏃?	8.1	6.5	1.6	110.7		

第5節 縄文時代後期・晩期の遺物

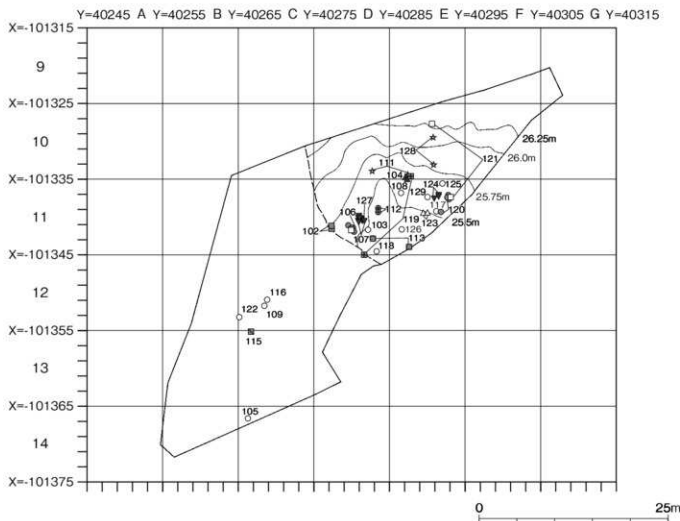
(1) 遺物 (第48図～第50図)

一次調査と二次調査において、A区でIV層のアカホヤ火山灰層 (K-Ah) の上層のⅡ・Ⅲ層中から縄文時代後期と晩期の遺物が出土している。いずれも旧地形の谷に分布している。遺構を伴わないことから流れ込みとみられる。

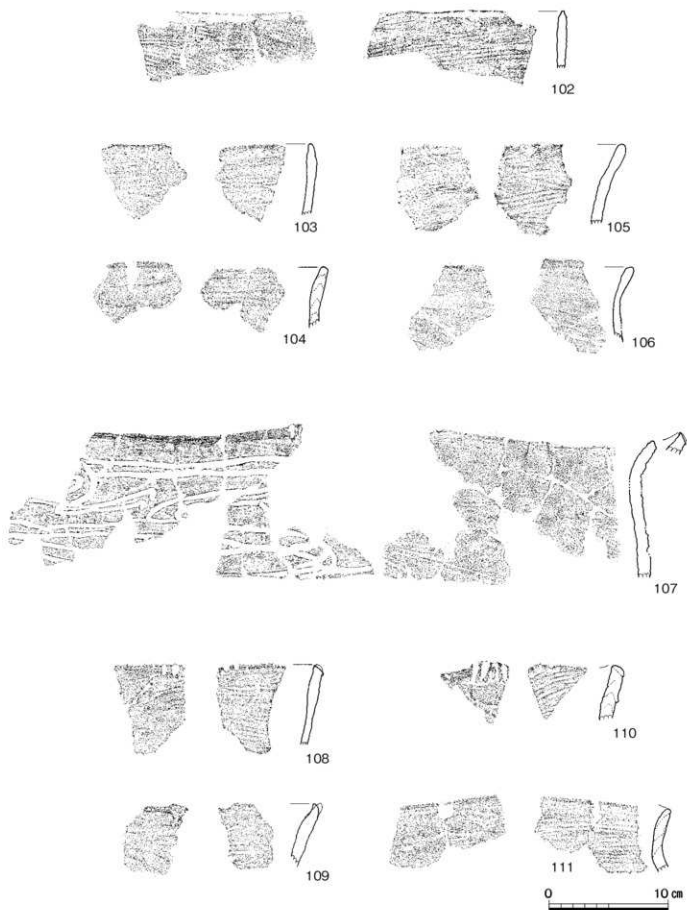
102～106は、貝殻条痕文土器の口縁である。102・103は深鉢の口縁部である。口縁は直口しており、口唇部はナデ調整で先端部が細くなっている。調整は内外面とも貝殻条痕文後ナデ調整が行われている。104は深鉢の口縁部で、口縁はやや外反気味である。外面はヘラ後ナデ、内面は貝殻条痕後ナデ調整を

行っている。105・106は深鉢の口縁で外反しており、内外面とも貝殻条痕後ナデ調整を行っている。

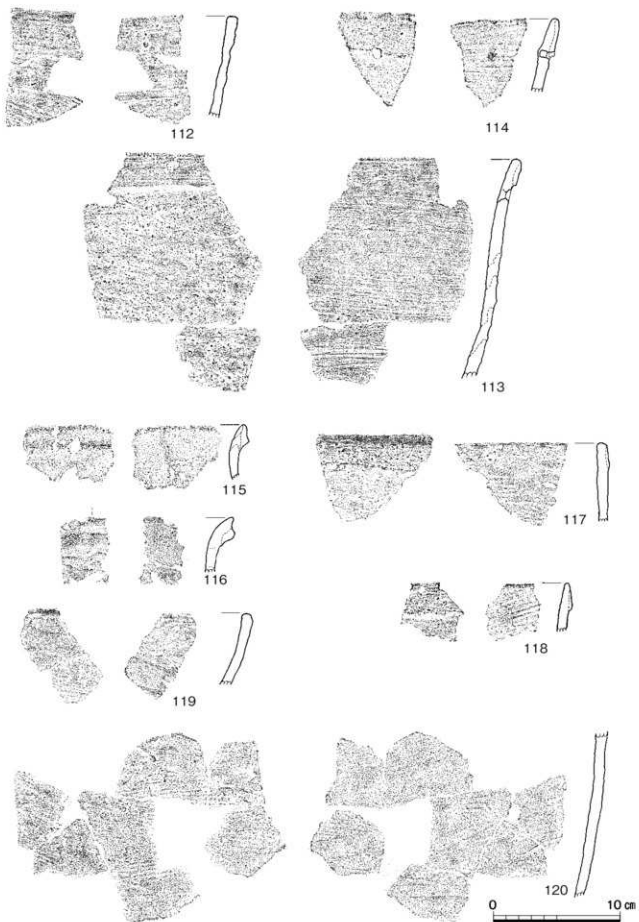
107～112は深鉢の口縁部で波状口縁とみられる。107は外面に横位や斜位に貝殻条痕後ナデ調整を行っている。また二本の平行な沈線文が施され、一部に渦巻文が施される。端部には刺突文が施される。内面は横位や斜位に貝殻条痕文後ナデ調整を行っている。阿高式系の土器とみられる。108～110は波頂部に押圧刻みが施されている。器面調整は両面とも横位や斜位の貝殻条痕後ナデ調整を行っている。111は口縁部がやや反り気味に外反している。器面調整は両面とも貝殻条痕後ナデ調整を行っている。112は直口する口縁で、器面調整は横位や斜位の貝殻



第47図 縄文時代後・晩期遺物分布図 (A区) (S=1/500)



第48図 縄文時代後・晩期の遺物実測図(1)

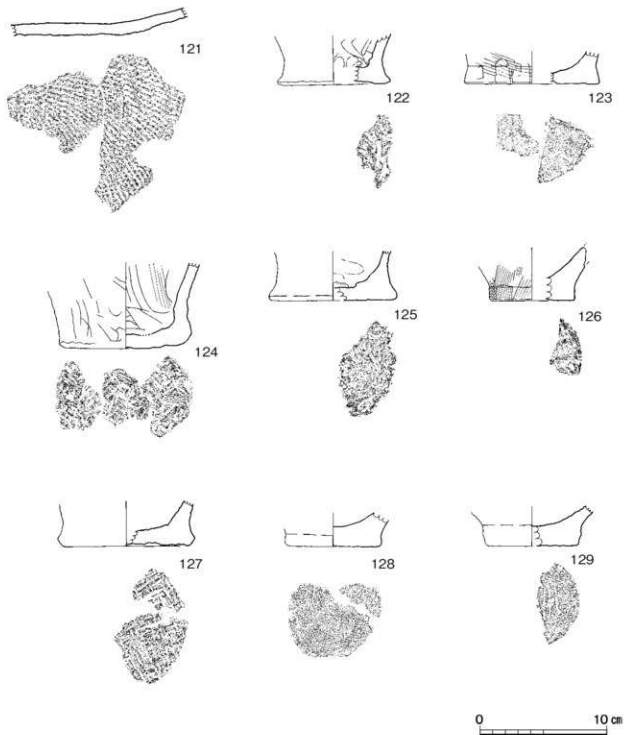


第49図 縄文時代後・晩期の遺物実測図(2)

条痕後ナデ調整が行われている。

113～118は深鉢の口縁部で幅広の突帯文が貼付されている。113は胴部がやや屈曲し口縁部がやや外反する深鉢の口縁から胴部である。口縁部に幅広の突

帯文が貼付され肥厚している。114は貼付突帯の下部に穿孔があるが未貫通である。器面調整は横位や斜位の貝殻条痕後ナデ調整を行っている。115・116はやや口縁が開き気味に外反している。いずれの器面



第50図 縄文時代後・晩期の遺物実測図(3)

調整は両面ともヘラ後ナデ調整を行っている。117は口縁が直口し、器面調整は両面とも貝殻条痕後ナデ調整を行っている。118も口縁は直口している。器面調整は外面はナデ、内面は貝殻条痕後ナデ調整を行っている。

119は無文土器の口縁部である。ゆるやかに外反する口縁である。両面ともミガキを施している。

120は深鉢の胴部である。器面調整は両面とも貝殻条痕後ナデ調整を行っている。外面にススが付着している。

121は浅鉢の底部から胴部で、底部外面には編布圧痕がみられる。内面はナデである。

122～129は底部である。122は上げ底気味で、底部に張り出しがある。外面はナデ、内面はヘラやヘラ後ナデ調整が行われている。底部は網代痕か？

123の底部はやや張り出しており、底部には細い葉脈痕と太い葉脈痕がみられる。外面は横位にハケ後ナデ調整が行われており、内面はナデである。124の底部には網代痕がみられ、端部はやや張り出している。外面は斜位に工具によるナデ調整、内面は工具によるハケメ痕がみられる。125は端部が張り出している。外面は下から斜位にナデ、内面には指ナデ調整が行われている。126は端部が張り出しておらず、外面は縦位や斜位のハケメ、内面はナデ調整が行われている。127は端部が張り出しており、底部は網代痕で、両面ともナデ調整が行われている。128は端部がやや張り出しており、器面調整は内外面ともナデである。129は器面調整は両面とも貝殻条痕後ナデ調整が行われており、端部は張り出していない。

第7表 土器観察表②

番号	種別	出土区	器種	部位	法量		焼成	文様及び調整		色調		胎土	備考
					口縁	底径		口縁	底径	外面	内面		
102	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	貝殻条痕後ナデ。部分的に強くナデた跡がみられる。	貝殻条痕の後、ナデ、部分的に強くナデた跡がみられる。	じぶい黄橙 (10YR6/3)	透黄 (2.5Y7/3) 灰黄 (2.5Y6/2)	4mm以下の赤褐色粒を多く含む。1mm以下の赤褐色、黒褐色粒を含む。1mm以下の黒色透明な光沢粒をわずかに含む。	
103	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	貝殻条痕後ナデ。美化している。	貝殻条痕後ナデ。	透黄 (2.5Y7/3)	じぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下の赤褐色粒を多く含む。1mm以下の赤褐色、黒褐色粒を少し含む。4mm以下の黒色透明な光沢粒をわずかに含む。	
104	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	ヘラ後ナデ。	貝殻条痕後ナデ。	黄灰 (2.5Y4/1)	灰 (5Y4/1)	3mm以下の赤褐色粒を多く含む。2mm以下の赤褐色粒を含む。2mm以下の黒色粒。1mm以下の黒色透明な光沢粒をわずかに含む。	
105	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	貝殻条痕後ナデ。	貝殻条痕後ナデ。	じぶい黄橙 (7.5YR7/4)	じぶい黄橙 (7.5YR6/3)	2mm以下の赤褐色粒を多く含む。1mm以下の乳白色、黒褐色粒を少し含む。黒褐色透明な光沢粒をわずかに含む。	
106	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	貝殻条痕後ナデ。	貝殻条痕後ナデ。	透黄 (2.5Y7/3) 灰 (5Y5/1)	透黄 (2.5Y7/3)	2mm以下の赤褐色粒を多く含む。1mm以下の赤褐色、黒褐色透明な光沢粒をわずかに含む。	
107	縄文土器	A区	鉢	口縁一部			良好	横方向や斜方向に貝殻条痕後ナデ。二本の平行な沈線文。一部漆文と黒部刷灰文がみられる。	横方向や斜方向に貝殻条痕後ヘラ、ナデ。	じぶい黄橙 (7.5YR7/4)	じぶい黄橙 (10YR7/4)	6mm以下の赤褐色粒を多く含む。1mm以下の赤褐色、黒褐色粒を少し含む。2mm以下の黒褐色粒をわずかに含む。2mm以下の赤白色粒をわずかに含む。	波状口縁
108	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	貝殻条痕後ナデ。	横方向や斜方向に貝殻条痕後ナデ。	じぶい黄橙 (7.5YR6/4)	じぶい黄橙 (10YR6/3)	3mm以下の赤褐色粒を多く含む。1mm以下の赤褐色、黒褐色透明な光沢粒をわずかに含む。2mm以下の赤褐色粒、乳白色粒を少し含む。	波状口縁
109	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	横方向や斜方向にヘラ後ナデ。	横方向や斜方向に貝殻条痕後ナデ。	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	2mm以下の赤白色粒と透明な光沢粒を多く含む。3mm以下の赤褐色と赤褐色透明な光沢粒を少し含む。1mm以下の黒褐色透明な光沢粒をわずかに含む。1mm以下の黒色透明な光沢粒をわずかに含む。	波状口縁
110	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	ナデ。部分的に粘土のたれがみられる。部分的にスス付着。	貝殻条痕後ナデ。	じぶい黄橙 (10YR7/4)	じぶい黄橙 (10YR6/3)	3mm以下の赤褐色粒を多く含む。2mm以下の赤褐色粒。1mm以下の黒褐色粒、金色に光る。4mm以下の白色不透明な光沢粒を含む。	波状口縁
111	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	貝殻条痕後ナデ。	貝殻条痕後ナデ。	透黄 (2.5Y7/3)	灰黄 (2.5Y6/2)	3mm以下の赤褐色粒を多く含む。2mm以下の赤褐色粒、乳白色粒を含む。	波状口縁
112	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	横方向や斜方向にヘラや細い工具痕のようなものもみられる。後ナデ。	横方向や斜方向にヘラ後ナデ。	じぶい黄橙 (10YR6/4)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	5mm以下の赤白色粒を多く含む。5mm以下の赤褐色粒。1mm以下の赤褐色透明な光沢粒を含む。2mm以下の赤褐色透明な光沢粒をわずかに含む。	
113	縄文土器	A区	深鉢	口縁一部			良好	貝殻条痕後ナデ。粘付突等。穿孔あり。	横方向に貝殻条痕後ナデ。	じぶい黄橙 (10YR7/3)	じぶい黄橙 (10YR7/4)	5mm以下の赤褐色粒を多く含む。3mm以下の赤褐色粒、灰白色粒を含む。3mm以下の赤褐色透明な光沢粒。2mm以下の黒褐色透明な光沢粒をわずかに含む。	
114	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	横方向や斜方向に貝殻条痕後ナデ。粘付突等文。穿孔あり。	横方向や斜方向に貝殻条痕後ナデ。	じぶい黄橙 (10YR7/4)	透黄 (2.5Y7/3)	3mm以下の赤褐色粒を多く含む。3mm以下の赤褐色透明な光沢粒。3mm以下の透明な黒褐色透明な光沢粒をわずかに含む。2mm以下の赤褐色透明な光沢粒をわずかに含む。	
115	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	ナデ。横方向にヘラ痕。粘付突等文。美化している。	横方向や斜方向にヘラ後ナデ。美化している。	橙 (7.5YR7/6)	じぶい黄橙 (10YR7/3)	4mm以下の赤褐色粒を多く含む。2mm以下の赤褐色粒を含む。1mm以下の黒褐色透明な光沢粒をわずかに含む。	

番号	種別	出土区	器種	部位	質量			焼成	文様及び調整		色調		胎土	備考
					口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面		
116	縄文土器	A区	鉢	口縁			良好	横方向や斜方向にへう後ナデ。	横方向にへう後ナデ。	にぶい青 (2.5Y6/4)	にぶい青褐 (10YR6/4)	2mm以下の黒褐色を多く含む。1mm以下の暗褐色を多く含む。1mm以下の透明光沢を少し含む。		
117	縄文土器	A区		口縁	34.6		良好	貝殻染後ナデ。貼付突帯立。部分的にスス付着。	貝殻染後ナデ。	灰青(2.5Y6/2)	灰青(2.5Y6/2)	3mm以下の乳白色粒を多く含む。3mm以下の赤褐色。黒褐色を少し含む。3mm以下の透明光沢をわずかに含む。		
118	縄文土器	A区		口縁			良好	ヨコナデ。貼付突帯立。	貝殻染後ナデ。	透青(2.5Y7/3)	にぶい青 (2.5Y6/3)	4mm以下の灰褐色を多く含む。4mm以下の黒褐色。にぶい青褐色を少し含む。2mm以下の乳白色粒をわずかに含む。		
119	縄文土器	A区		口縁			良好	ミガキ。部分的に黒化。	ミガキ。黒化気味。	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	2mm以下の乳白色粒を多く含む。3mm以下のにぶい赤褐色を多く含む。1mm以下の黒褐色を多く含む。		
120	縄文土器	A区		胴部			良好	貝殻染後ナデ。部分的にスス付着。	貝殻染後ナデ。	にぶい青 (2.5Y6/3)	透青(2.5Y7/3)	3mm以下の灰褐色を多く含む。1mm以下の黒褐色。赤褐色。乳白色粒。黒褐色の黒褐色透明光沢を多く含む。		
121	縄文土器	A区		底部～胴部			良好	指繰後。部分的にスス付着。	ナデ。	にぶい青褐色 (10YR7/4)	黄灰(2.5Y5/1) 暗灰青 (2.5Y6/3)	3mm以下の赤褐色。黒褐色。1mm以下の乳白色粒を多く含む。黒褐色。無色透明な光沢。黄色に光るをわずかに含む。		
122	縄文土器	A区		底部	8		良好	ナデ。	へうやへう後ナデ。指押さえ。	透青(2.5Y7/3)	にぶい青褐色 (10YR7/3)	2mm以下の赤褐色を多く含む。2mm以下の白色粒を多く含む。		
123	縄文土器	A区		底部	10.3		良好	横方向にハケ後ナデ。指繰圧痕。スス付着。底部に黒化。	ナデ。	透青(2.5Y7/4)	にぶい青褐色 (10YR6/4)	にぶい赤褐色を多く含む。透青色粒を多く含む。褐色の光沢をこくわずかに含む。		
124	縄文土器	A区		底部	10		良好	斜方向に工具によるナデ。黒部銅代履?	工具によるハケ。	にぶい青褐色 (10YR6/4)	にぶい青褐色 (10YR6/3)	1mm以下の赤褐色。暗褐色白色粒。暗褐色褐色を多く含む。		
125	縄文土器	A区		底部	9.8		良好	下から斜方向にナデ。黒化気味。	指ナデ。指繰圧痕。	透青(2.5Y7/4)	にぶい青褐色 (10YR6/3)	4mm以下の赤褐色。灰褐色を多く含む。2mm以下の黒褐色。1mm以下の赤褐色を少し含む。3mm以下の透明光沢をわずかに含む。		
126	縄文土器	A区		底部	6.6		良好	縦や斜方向のハケ目。	ナデ。	にぶい青 (7.5YR6/4)	にぶい青 (7.5YR7/4)	1mm以下の乳白色粒を多く含む。1mm以下の黒褐色を多く含む。1mm以下の透明光沢を多く含む。		
127	縄文土器	A区		底部	9.9		良好	ナデ。底部銅代履か?	ナデ。	青(5YR6/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	2mm以下の黒褐色を多く含む。5mm以下の赤褐色を多く含む。3mm以下の赤褐色を少し含む。3mm以下の透明光沢をわずかに含む。3mm以下の赤褐色を多く含む。		
128	縄文土器	A区		底部	6.8		良好	ナデ。	ナデ。	にぶい青褐色 (10YR6/4)	にぶい青褐色 (10YR7/4)	1mm以下の乳白色粒を多く含む。暗褐色無色透明光沢を少し含む。		
129	縄文土器	A区		底部	7		良好	貝殻染後ナデ。	貝殻染後ナデ。	にぶい青褐色 (10YR6/4)	灰青褐 (10YR6/2)	4mm以下の黒褐色を多く含む。暗褐色褐色を多く含む。乳白色粒を多く含む。透青色粒を多く含む。		

第6節 その他の遺構・遺物

(1) 遺構

時期不明の遺構として、土坑を5基検出した。いずれも丘陵の頂上部であるB-1区で検出している。1～4号土坑は、炉穴の可能性もあるが、床面や壁面が焼けていなかったり、掘り込みが浅いなどの理由で確定できていない。

1・2号土坑〔SC1・2〕 (第52図)

H2グリッドで確認した。1号土坑と2号土坑は切り合い関係がある。1号土坑の長軸は約130cm、短軸は約50cmの楕円形プランを呈する。埋土は褐色土(Hue10YR4/6)に褐色のブロックが入る。2号土坑は、1号土坑に切られているために推定になるが、長軸約130cm、短軸約60cmの楕円形プランである。いずれも壁面や床面は焼けていないが、炉穴の可能性はある。

3・4号土坑〔SC3・4〕 (第52図)

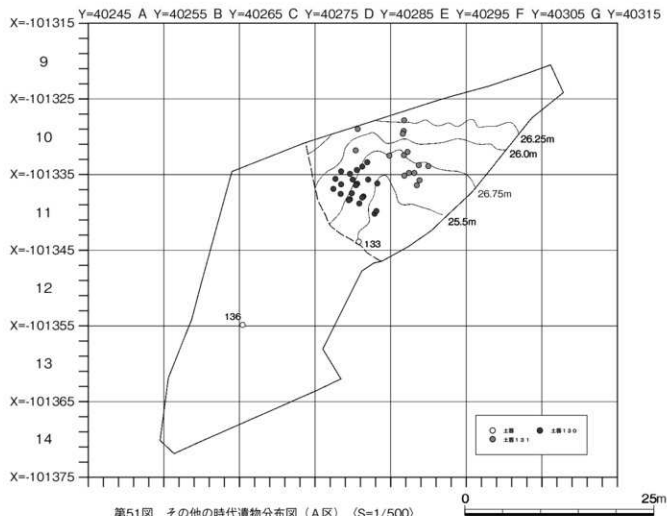
風倒木を検出したH3グリッドで確認した。いずれもⅦ層の明褐色土に黒褐色土の硬質の埋土である。埋土の厚さは非常に薄く、5mm以下である。3号土坑の長軸は約136cm、短軸約56cmの楕円形プランを呈する。4号土坑は長軸約148cm、短軸約60cmの楕円形プランを呈する。

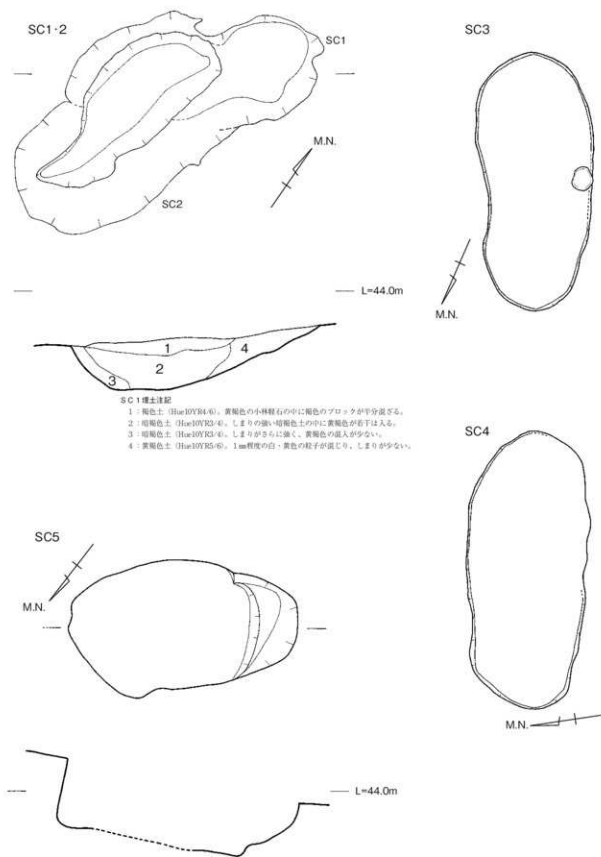
5号土坑〔SC5〕 (第52図)

J2グリッドで確認した。土層確認のためのトレンチにより削られたために詳細は不明である。埋土中に礫が入り込んでいた。

(2) 遺物 (第53図)

畑地であるA区からは弥生時代の土器と古墳時代・古代の須恵器・土師器が出土している。須恵器の坏はⅡ層の黒色土がわずかに残存していた箇所から





第52図 土坑実測図 (S=1/20)

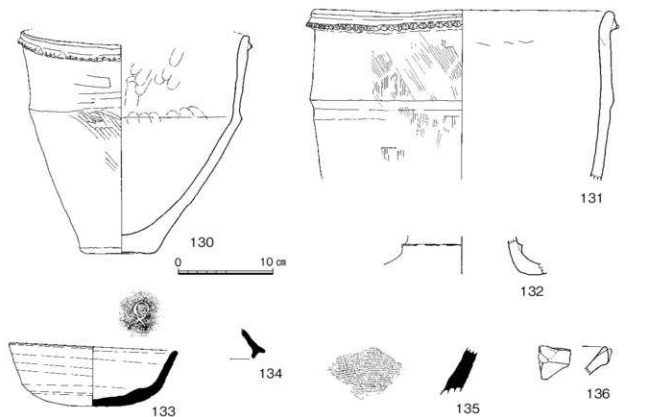
出土している。遺構は伴わず、いずれも旧地形の谷の落ち込み部分から出土している。

130～131は弥生時代前期の甕である。口縁部に一条の刻み目突帯を貼付している。いずれも胴部が屈曲している。130は完形の甕である。器面調整は口縁から胴部にハケメ、胴部から底部は斜位や横位のナデ、部分的にミガキが施されている。内面は指によるナデと指押さえ、底部の内面は指押さえである。上げ底である。風化している。131は甕の口縁から胴部である。器面調整は縦位や斜位にハケメで丁寧な

ナデ調整が行われている。

132は、弥生時代の壺である。突帯が口縁部に貼付されている。器面調整は両面ともヨコナデである。

133は古墳時代後期の須恵器の坏身である。内面にヘラ記号がある。8世紀とみられる。134は坏の蓋の口縁部である。135は壺の底部付近である。外面はカキ目で、内面はナデ調整である。137は東播系の握ね鉢の口縁部で片口部分であり、自然釉がかかる。



第53図 その他の時代の遺物実測図

第8表 土器観察表③

番号	種別	出土区	器種	部位	重量 口径 底径 高さ	焼成	文様及び調整		色調		胎土	備考
							外面	内面	外面	内面		
130	弥生土器	A区	深鉢	口縁～底部	23.5 6.9 22.1	良好	横・斜方向のナデ。刻み目突帯文。	指ナデ。指押さえ。	にぶい黄褐色(10YR7/4)にぶい橙(7.5YR6-6)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	5mm以下の赤褐色粒を多く含む。1.5mm以下の乳白色粒を少し含む。	
131	弥生土器	A区	深鉢	口縁～胴部	23.2	良好	縦・斜方向にハケ目あり。ナデ。刻み目突帯文。一部スス付着。	ナデ。	黄褐色(2.5YR5/4)にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい黄褐色(10YR5/4)	3mm以下の白灰色粒。2mm以下の赤褐色粒を含む。底縁に乳白色粒を少し含む。	
132	弥生土器	A区	壺	胴部		良好	ヨコナデ。貼付突帯文。縦・横方向のナデ。		にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	3～4mm以下の黒色透明粒。1mm以下の灰褐色粒。乳白色粒を含む。	
133	須恵器	A区	坏身	口縁～底部	13.1 4.7 7.1	堅緻	回転ナデ。ヘラケズリ。	ナデ。	灰(5Y7/1)	灰(5Y7/1)	精良。2mm以下の黄褐色粒を多く含む。	へう記号あり。自然釉
134	須恵器	A区	坏蓋	口縁		堅緻	回転ナデ。	回転ナデ。	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	精良。3mm以下の白赤不透明粒。やや光沢のある粒を含む。	
135	須恵器	A区	壺	底部付近		堅緻	カキ目。	ナデ。	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y6/1)	精良。	
136	須恵器	A区	握ね鉢	口縁(注口)		堅緻	ナデ。	ナデ。	暗灰青(2.5Y5/2)	暗灰青(2.5Y5/2)	精良。	

第V章 まとめ

本章では、本遺跡の主な遺構である集石遺構と遺物について整理していきたい。

【集石遺構】

集石遺構とは、一般に石蒸し料理などの調理施設と考えられている⁽¹⁾。よって、集石遺構は被熱して赤化した礫の集合体と捉えられる。調査では被熱して赤化していない礫の集合体についても、被熱の準備段階の集石遺構の一つとして認識した。

いずれの調査区でも散礫が検出され、その散礫を取りはずした後、集石遺構を検出している。散礫については、整理作業で集石遺構の礫の接合は行わない予定であったので、その広がりを記録してすべて取りはずした。現地で散礫の礫の石材や重量などの記録を残すべきであったが、調査期間の問題で記録を取ることは行わなかった。

(1) 形態分類について (第19図)

検出された集石遺構を形態によって3タイプに分類し、礫の集中度によってさらに3タイプに細分類した。その結果以下ようになった。

【A区】

I 類型	密集型：0基	(0%)
	集中型：2基	(11%)
	散在型：5基	(26%)
II 類型	密集型：1基	(5%)
	集中型：3基	(16%)
III 類型	散在型：2基	(11%)
	密集型：4基	(21%)
	集中型：0基	(0%)
	散在型：2基	(11%)

【B-1区】

I 類型	密集型：0基	(0%)
	集中型：0基	(0%)
	散在型：2基	(17%)

II 類型	密集型：9基	(75%)
	集中型：1基	(8%)
	散在型：0基	(0%)
III 類型	密集型：0基	(0%)
	集中型：0基	(0%)
	散在型：0基	(0%)

【B-2区】

I 類型	密集型：0基	(0%)
	集中型：5基	(50%)
	散在型：0基	(0%)
II 類型	密集型：1基	(10%)
	集中型：3基	(30%)
III 類型	散在型：0基	(0%)
	密集型：1基	(10%)
	集中型：0基	(0%)
	散在型：0基	(0%)

集石遺構の形態では、A区とB-2区で、I～IIIの3タイプに分かれる。B-1区では、IとIIの2タイプに分かれる。B-2区では、I～IIIの3タイプに分かれる。B-1区の集石遺構は、配石をもたないことと掘り込みと配石をもつタイプがないということがあげられる。

礫の集中度では、I類型は集中型と散在型に分かれ、II類型では密集・集中・散在型の3タイプに分かれる。B-1区では、I類型では散在型の1タイプに、II類型は密集型と集中型の2タイプに分かれる。III類型は密集型の1タイプに分かれる。

(2) 使用された礫について (第54～第56図)

二次調査で検出した集石遺構の礫は、東睦原整理作業事務所で行った。ただし接合作業は行っていない。

各調査区ごとに集石遺構を形態と礫の集中度のタイプごとに分けて礫の分析結果を以下のように整理した。

【A区】

◎ I 類型

○ 集中型 (SI3, SI7)

石 材：9割以上が砂岩とホルンフェルス
 完形率：7～9割がC
 赤化率：8～9割が赤化
 重 量：漸減型

○ 散在型 (SI4, SI13, SI14, SI16, SI18)

石 材：8～9割が砂岩とホルンフェルス
 完形率：SI14, SI16が5～6割赤化
 残り7～9割赤化
 重 量：漸減型

◎ II 類型

○ 密集型 (SI6)

石 材：9割以上が砂岩とホルンフェルス
 完形率：9割がC
 赤化率：6割以上赤化
 重 量：漸減型

○ 集中型 (SI1, SI17, SI19) ※SI1はデータなし

石 材：9割以上は砂岩とホルンフェルス
 完形率：9割以上がC
 赤化率：6～7割が赤化
 重 量：漸減型

○ 散在型 (SI11, SI15)

石 材：9割以上が砂岩とホルンフェルス
 完形率：9割がC
 赤化率：SI11…3割、SI15…7割
 重 量：漸減型

◎ III 類型

○ 密集型 (SI2, SI5, SI10, SI12)

石 材：8～9割が砂岩とホルンフェルス
 完形率：8～9割がC
 赤化率：7～9割が赤化
 重 量：漸減型

○ 散在型 (SI8, SI9)

石 材：9割が砂岩とホルンフェルス
 完形率：8～9割がC
 赤化率：8～9割が赤化
 重 量：漸減型

【B-1区】

◎ I 類型

○ 散在型 (SI24, SI28)

石 材：9割以上が砂岩とホルンフェルス
 完形率：8～9割がC
 赤化率：8～9割が赤化。中が3割。
 重 量：漸減型

◎ II 類型

○ 密集型 (SI20, SI22, SI23, SI25, SI26, SI27, SI29, SI30, SI31)

石 材：9割以上が砂岩とホルンフェルス
 完形率：8～9割がC
 赤化率：SI30, SI31…8～9割赤化
 SI20, SI22, SI23, SI25, SI26, SI29
 …6～7割赤化
 SI27…4～5割赤化
 重 量：漸減型

○ 集中型 (SI21)

石 材：10割砂岩とホルンフェルス
 完形率：9割がC
 赤化率：6割赤化
 重 量：漸減型

【B-2区】

◎ I 類型

○ 集中型 (SI35, SI37, SI38, SI39, SI41)

石 材：9割以上が砂岩とホルンフェルス
 完形率：7～9割がC
 赤化率：7～9割が赤化
 重 量：漸減型

◎ II 類型

○ 密集型 (SI40)

石 材：9割が砂岩とホルンフェルス
 完形率：8割がC
 赤化率：7割赤化
 重 量：漸減型

○ 集中型 (SI33, SI34, SI42)

石 材：9割砂岩とホルンフェルス (砂岩が
 6～8割)
 完形率：9割C
 赤化率：SI34, SI42…7割赤化
 SI33…4割赤化
 重 量：漸減型

◎Ⅲ類型

○密集型 (SI36)

石 材：9割以上砂岩とホルンフェルス
完形率：9割C
赤化率：7割赤化
重 量：漸減型

以上、集石遺構の形態別ごとに礫整理の結果を整理した。

その結果、集石遺構の礫の石材は、8～9割が砂岩とホルンフェルスが占め、尾鈴山酸性岩類が極端に少ないという結果が得られた。このことについては、西畦原第2遺跡（三次調査）において、旧石器時代の礫群と縄文時代早期の集石遺構の礫を分析した結果、時代とともに砂岩が個数・重量とも増加し、尾鈴山酸性岩類は減少していく傾向を指摘している(2)ことと一致する。また、ホルンフェルスは旧石器時代には増加の傾向にあったが、縄文時代早期には減少に転じていることを指摘しているが、本遺跡の集石遺構にも砂岩の割合が多いものもあることから集石遺構の時期差として捉えられることも考えられる。礫の供給地については、本遺跡の近くに藤山川が流れており、礫の獲得が容易であったため石材も砂岩やホルンフェルスが多くなったと考えられる。

礫の完形度ではほとんどの集石遺構の礫の8～9割が40%未満であり、使用頻度が非常に高いことが指摘できよう。

また赤化度については、ほとんどが赤化しているが、集石遺構のなかには赤化の割合が3～5割のものもある。礫の完形度では40%未満のものが多くことから、使用されていたことは考えられる。被熱の問題は、単に集石遺構が被熱の準備段階にあるという理由だけではなく、それ以外の理由があるように思われる。一つの答えとして調理法によって礫の被熱の違いが起きたのではないかと考えられる。このことは、実際にさまざまな調理法を試して礫の被熱の状況を調べるといった実験的なデータをもとに検討する必要がある(3)。

礫の重量については、重量分布の結果、重量が重くなるほど数量が減少する漸減型をとるものがほと

んどであることが指摘できる。

〔遺物〕

遺物としては、旧石器時代の石器、縄文時代の土器、石器、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器が出土した。

旧石器時代の石器は、ナイフ形石器などの製品と石核・剥片・碎片などの石器製作に関わる遺物が出土している。出土層が第Ⅴ層・Ⅵ層と縄文時代の包含層であり、丘陵という地形的な条件もあって文化層の認定は難しい。接合資料も出土していることから石器製作の場も存在するが、石器ブロックなどは確認できなかった。

縄文時代の遺物としては、早期の貝殻条痕文土器や押型土器と後期～晩期の阿高系の土器が出土している。早期の貝殻条痕文土器はB-1区の散礫中から出土している。また押型土器は、A区では43の田村式がB-2区でも44の押型土器が集石遺構中から出土している。貝殻条痕文土器の一部と押型土器は共存する例があるが、貝殻条痕文土器が押型土器に先行する時期に存在しており、時間的な差があるとみられる。後期～晩期の土器はA区の旧地形の谷部の落ち込みから出土している。遺構に伴わずに出土しており、流れ込みとみられる。

弥生時代の土器と古墳時代の須恵器もA区の落ち込み部分から出土しており、流れ込みとみられる。

【まとめ】

本遺跡では、42基の集石遺構が検出された。集石遺構については、形態の違いを時間的な違いとみる見解がある。つまり、掘り込みを持たないタイプ(I類)→掘り込みを持つが、配石を持たないタイプ(II類)→掘り込みと配石を両方もつタイプ(III類)というように新しくなるという。本遺跡においても、3タイプの集石遺構に分類されるが、A区とB-2区では3タイプに、B-II区ではIとIIの2タイプに分類され、各調査区にそれぞれのタイプが存在する状況である。しかし、検出した層は同じ層であり、層序的な違いはみられない。形態の違いのみで時間的な差を指摘することはできない。本遺跡では、B-1区

で検出した集石遺構の上面の散礫から縄文時代早期の前半の桑ノ丸式の貝殻条痕土器が出土している。またA区とB-2区で検出した集石遺構では田村式とみられる押型土器が出土している。また、調理法により集石遺構の形態が異なることも指摘されている(4)。つまり、集石遺構の形態の違いを料理法による違いと捉えている。同じ調査区で様々な形態の集石遺構が検出された場合、時期的な差と捉えるだけでなく、そこで調理されたもの(調理法)の違いがあったと捉える見方も必要である。以上のことから、本遺跡の集石遺構を整理してみると、調査区内で時期的な変遷を捉えるよりも、調査区毎に時期的な差があると捉えることが妥当と思われる。つまり、B-1区の集石遺構が古く、A区とB-2区の集石遺構が新しいということが指摘できるのではないだろうか。その理由としては、B-1区とA区とB-2区で出土している土器の違いから時期的な差があると考えられるからである。

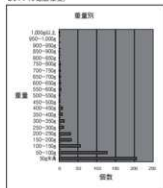
最後に、本遺跡の調査は台地の縁辺部とその下の低地の調査であった。遺物は主に低地から出土しており、ほとんどが遺構に関係しておらず、流れ込みと考えられる。丘陵部で出土した遺物も傾斜にそった分布をしていることから原位置を動いているとみられる。また遺構としては、集石遺構のみの検出で、集石遺構を使用した人々の住居跡などは検出されな

かった。時期不明の土坑を確認したが、炉穴の可能性もあり、集石遺構と炉穴が集落の周囲に広がるといった空間的に遺構が広がる例があることから、恐らく台地の中心部に住居などが存在する可能性がある。また、出土した遺物も縄文時代から古墳時代にかけてのものであり、ほとんどが流れ込みであることから縄文時代から古墳時代にかけての集落が存在したことが推定できる。

(参考文献)

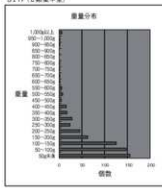
- (1) 小栗一夫「遺構研究 集石遺構」
〔『縄文時代』第10号、縄文時代文化研究会、1999年〕
- (2) 『西畦原第2遺跡(二次・三次)』
〔宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第109集、
宮崎県埋蔵文化財センター、2005年〕
- (3) 竹内直文「礫群の重量分布検討の意義」
〔『考古学ジャーナル』№531、2005年〕
- (4) 野嶋洋子「焼石調理の民俗誌—礫群研究の民俗考古学的視点—」〔『考古学ジャーナル』№531、2005年〕

S114 (I期前中型)



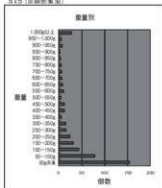
(I 類型)

S117 (II期集中型)



(II 類型)

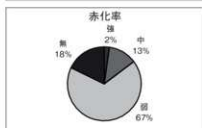
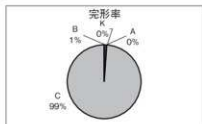
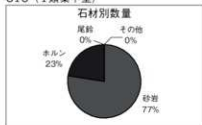
S15 (III期集中型)



(III 類型)

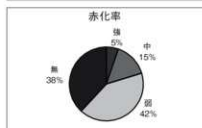
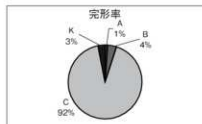
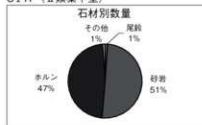
第54図 集石遺構礫重量分布図

SI3 (I類集中型)



(I類型)

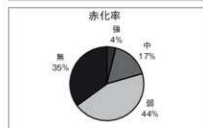
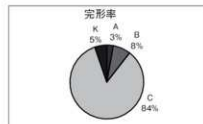
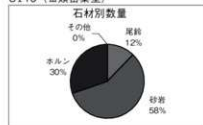
SI17 (II類集中型)



(II類型)

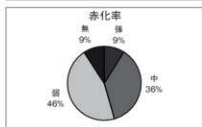
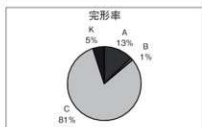
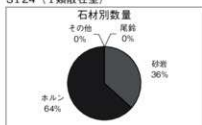
(A区集石遺構検分析)

SI10 (III類密集型)



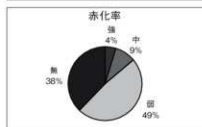
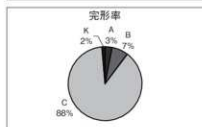
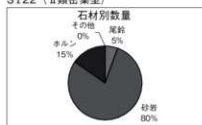
(III類型)

SI24 (I類散在型)



(I類型)

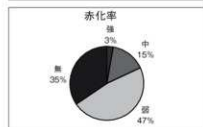
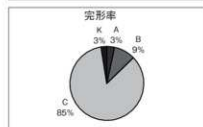
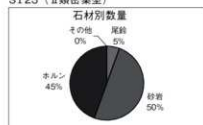
SI22 (II類密集型)



(II類型)

(B-1区集石遺構検分析)

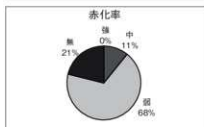
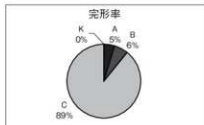
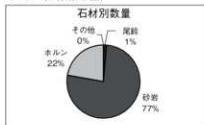
SI23 (II類密集型)



(II類型)

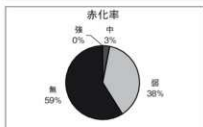
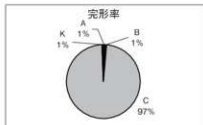
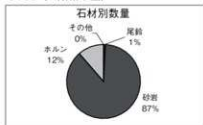
第55図 集石遺構検分析図 (1)

S137 (I類集中型)



(I類型)

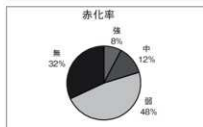
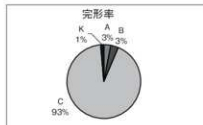
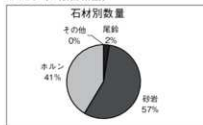
S133 (II類集中型)



(II類型)

(B-2区集石遺構燻分析)

S136 (III類密集型)



(III類型)

第56図 集石遺構燻分析図 (2)



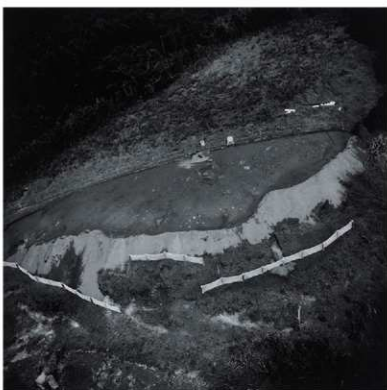
遺跡遠景 (北から)



遺跡遠景 (南から)



A区散漏檢出状況



B-1区散漏檢出状況



A区散濺検出状況 (北から)



S11散濺検出状況 (南から)



B-2区散濺検出状況 (南から)



B-1区集石遺構検出状況 (北から)

図版 4



S I 3検出状況 (I類密集型)



S I 40検出状況 (II類密集型)



S I 3完掘状況



S I 40完掘状況



S I 4検出状況 (I類散在型)



S I 1検出状況 (II類集中型)



S I 4完掘状況



S I 1完掘状況



SI15検出状況 (Ⅱ類散在型)



SI19検出状況 (Ⅲ類散在型)



SI12検出状況 (Ⅲ類密集型)



SI19配石検出状況



SI12配石検出状況



SC3完掘状況



SI12完掘状況

図版 6



SC6半截状況



作業風景 1



A区遺物出土状況 (アカホヤ土)



作業風景 2



B-1区XI層状況



接合資料 1



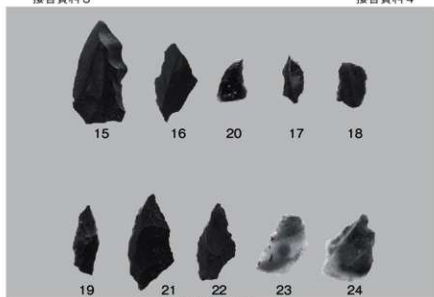
接合資料 2



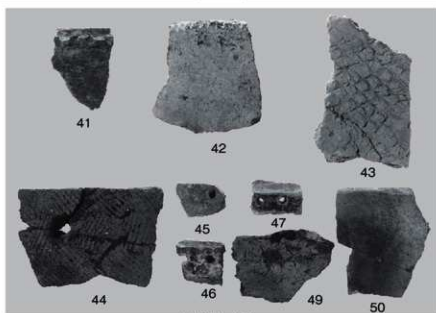
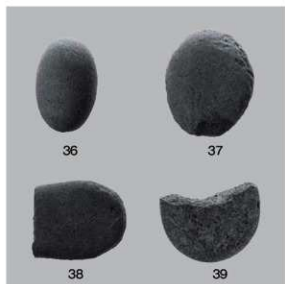
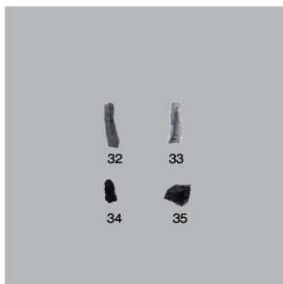
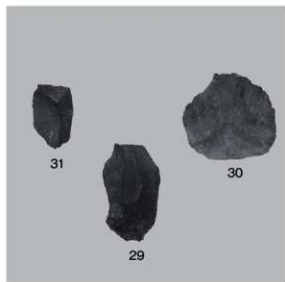
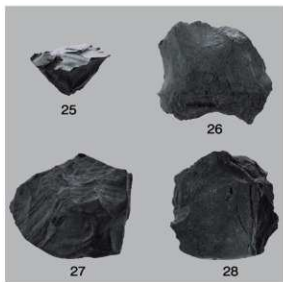
接合資料 3



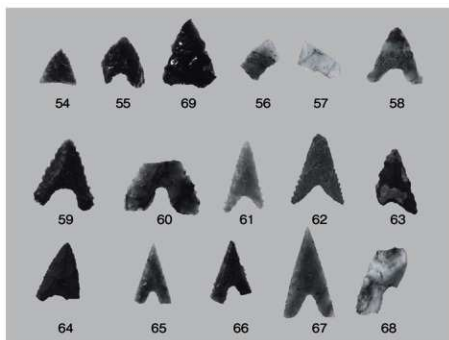
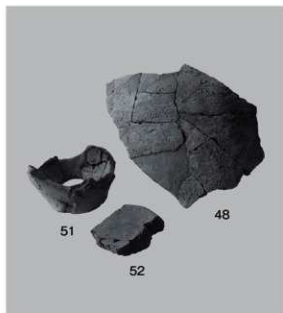
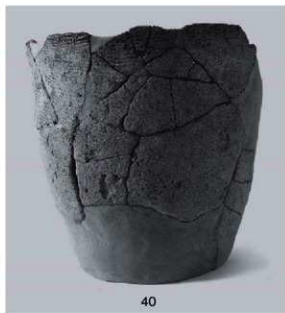
接合資料 4



出土遺物 (1)

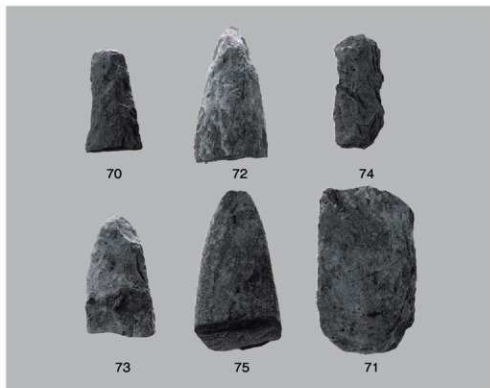


出土遺物 (2)

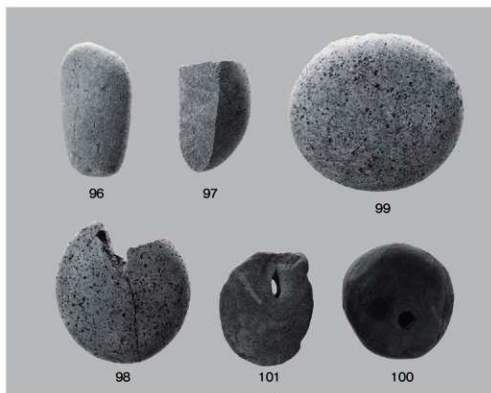
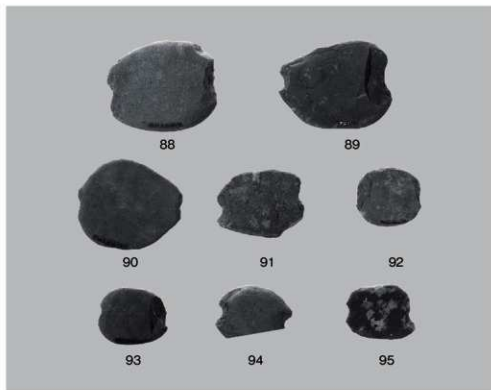


出土遺物 (3)

图版10

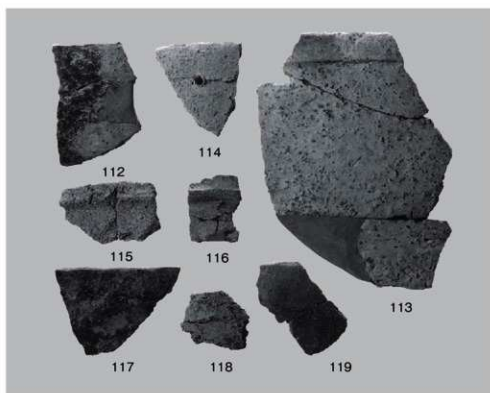
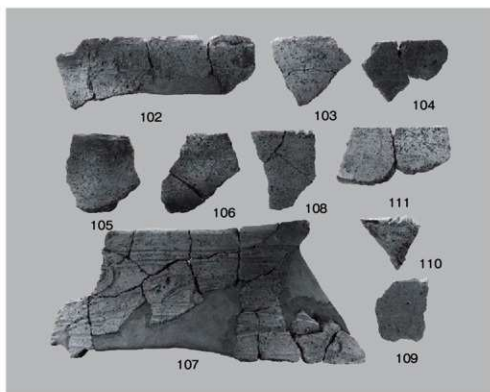


出土遺物 (4)

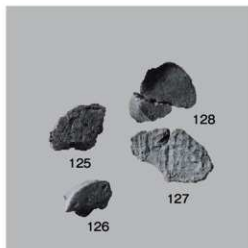
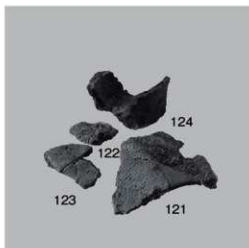


出土遺物 (5)

図版12



出土遺物 (6)



出土遺物 (7)

報告書抄録

ふりがな	ふじやまだいいちいせき							
書名	藤山第1遺跡							
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	39							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第142集							
執筆・編集 担当者名	小山 博							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	2007年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじやまだいいち 藤山第1遺跡	みやまけん 宮崎県 みやまけんしよとうげん 児湯郡新富町 おほふじやま 大字新田 ふじやま 字総内	454028		32° 5'10"	131° 25'45"	一次調査 20020603 ↓ 20020715 二次調査 20040713 ↓ 20040924	一次調査 500㎡ 二次調査 1,800㎡	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落跡 散布地	後期旧石器時代 縄文時代早期 * 後・晩期	集石遺構 土坑	42基 5基	ナイフ形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃・剥片・石核 貝殻条痕文土器・押型文土器・石鏃・石斧 孔列文土器				

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第142集

藤山第1遺跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書39

2007年1月31日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985 (36) 1171 FAX 0985 (72) 0660

印刷 株式会社 都城印刷

〒885-0055 宮崎県都城市早鈴町1618番地

TEL 0986 (22) 4392 FAX 0986 (22) 4891
